
終わり始まる物語

冬雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わり始まる物語

【Zコード】

Z3221C

【作者名】

冬雪

【あらすじ】

学園力オス第一弾。『エ』と呼ばれる正体不明のシステムにより、『学園』という名の箱庭に送られた、とあるいつまで経っても始まらない少年が、どこまで行つても終わらない少女に助けられ、人間に至る軌跡を描いた物語

+プロローグ+

#プロローグ#

あるいは、二人の関係に意味などなかつたのかもしない。
どうしようもなく人間味に欠け、しかし実像だつた少年。
どうしようもなく人間味に溢れ、しかし虚像だつた少女。
その出会いは必然であり、故に別れもまた必然だつた。

冷酷に判ずるならば、全ては偽りだつたのだから。

伝え合つた言葉も、繋ぎ合つた手のぬくもりも、分かち合つた時

間も。

だけどそれを 一 片の価値もなかつたと、誰が笑えるだらう
か。

弱さ故の依存だつたかもしれない。辛さ故の逃避だつたかもしれない。
それでも。

今にも崩れ落ちそうな日常を保とうとした、崩れ落ちてしまつた
正常を取り戻そうとした、彼らの、彼女たちなりの、精一杯の抵抗
だつたのだ。

どんなに無様でも、どんなに愚かでも。

墓標のように整然と打ち立てられた生の証を、一本一本慈しむそ
の作業は、灯籠流しと例えるには残酷過ぎる現実の中で。

願わくば。

この終わりに臨む少年少女にどうか、人間らしさに満ちた祝福を

+プロローグ+（後書き）

相当久しぶりの投稿ですへへ；
なんていうか、プロローグを見ていただけばおわかりなると思いま
すが、タイトルのように爽やかな作品にはならない方向です。ミ
スマッチの妙というには、あまりにも対極です。ねじれの位置です。
そんな感じで、不特定に更新していく予定ですので、どうか生暖か
い目で見守つてやつて下さいm(ーー)m

第一章 箱庭には一匹の小鳥

第一章 箱庭には一匹の小鳥
(One funny day)

0

孤独と書いてヒトと読み、
一人と書いてゼロと読む。

これは、俺がヒトになるまでの初めの一歩。

1 孔谷透

色褪せた記憶を手繕り寄せ、最古の足跡を思い出す。

到達したのは、世界の天辺。小さなこの手を伸ばせば、きっと太陽に灼かれるだろう。

目の前には、一人の少女。逆光で表情がうまく読み取れない。怒っているようにも、悲しんでいるようにも、あるいは、喜んでいるようにも、見える。

俺の問いに対し、少女は全く予想外の返答を寄越した。それこそ、天地が逆転したような、信じていたもの全てが嘘だったような、世界が初めから反転していたとでも告げるような、物語が終わりから始まるような、明確な拒絕だった。

呆然と立ち竦む俺に、少女は握手を求めるように手を差し伸べた。

その一指は、世界を潰した証として、茜色の黄昏よつなお赤い血糊に濡れている。

風は吹けども無音の世界の中、不意に、彼女の唇が形を変える。無造作に作られた、この世全ての価値を重ねても到底届かない美しさ。

そして彼女は。

一度と忘れよづのない一節の旋律を、^{コトバ} 穏やかに紡いだ

「……くーや、どうしたの？」

気づけば、少女の顔が頭上にあった。

「別に、何も」

思考を中断して、現実感を取り戻す。丁度一段落ついたところだつたから、腹立たしさは感じなかつた。

固くなつた首をほぐす。一面に広がる、所々に綿飴を乗せた群青の壁。眩しくて直視できない太陽は、しかし少女

とおのべ（みつき）の背を擦り抜けて、目覚めを促すべく陽光を放し出していく。

「みつきこそ。今、授業中だろ？」

何故ここがわかつたんだ、とは聞かない。屋上に上つてすぐの梯子の先にあるここは、屋上の真ん中に聳え立つ、後から取つて付けたような時計塔が日光を遮ってくれるお陰で快適に睡眠を取れる、俺の特等席だから（生憎、今は角度が悪いみたいだけど）。本当に見つかりたくないときは、他の場所を選ぶ。

「もうお昼休みだよ。今日は久しぶりの部活だから、くーやがいないと寂しいな」

……俺がサボるのを見越して、釘を刺しこきたらしい。いい判断だ。

「別に、俺がいなくても問題ないだろ？」

「うん」

……あっさりと即答された。少しげんなりする。みつきは、俺の心中を知つてか知らずか、無邪気な笑顔になる。

「でも、いないとわたしが寂しいよ」

「……大丈夫。行くよ」

何を言う気も失せてしまつた。

不定期に開かれる、部活とは名ばかりで、実質的な活動は皆無に等しいただの集会。

だけど、いつも通り活動内容が陳腐なものであつても、あそこにいるメンバーはあらゆる意味で 例えは、俺の推測の範疇を越えた行動を取つてくれる点 貴重なので、部長風に言えば、価値はそれほど下がらない。問題なのは、あくまで刺激値。

俺が乗り気でないのを悟つたのか、みつきは耳元に顔を寄せて、囁いた。

「ちょっと大きな話題だつてさ」

へえ。

それは、また。

その情報のせいか、はたまた悪戯っぽいみつきの表情のせいか、心拍数が少しだけ早くなつた。

「放課後また会おう、みつき」

……別に動搖を隠すためではないけれど、みつきから体ごと顔を背けて、俺は再び眠りについた。

『学園』。

この学園は、外部の人間にはただそう呼ばれる。その存在意義が他のものとは全く異なるので、特別な名称を付ける必要がないからだ。

広大な敷地、最新鋭の設備、破綻した規律、和気藹々とした空気。そういう点から評価するならば、俺たち世界から外された逸脱

者たちにとつて、ここは正に理想郷だろう。

しかし。

俺からすれば してあるいは他の少数の『生徒』にとつても
、ここもまた緩慢な地獄以外の何物でもない。

「 救われないな」

誰に言うでもなく呟いた。

特に意味はなかつたので、当然、何の感慨も湧かなかつた。代わりに、言葉を後追いした思考が、救われない人間がいるとすれば、希望のない人間がいるとすれば、それは間違いなくお前だろう、と冷徹に断言した。

時計塔に住む、大嫌いな少女が言つよつこ。

「 希望、ね……」

改めて考えるまでもなく、俺に一番相応しくない言葉だ。始まりがあるから終わりがある。仮定が条件が定理があるから結論を導ける。

ならば。

そもそも何も発生させることのできない俺に、結果^{キボウ}なんてありはない。

人気のない、長い廊下を闊歩する。窓の外では、野球やらサッカーやら、名前も知らない同胞たちが高校生らしい青春真っ盛りな部活動に勤しんでいた。自我を保つための上辺だけの馴れ合い^{ヒトハシ}とはいえ、笑い合い励まし合つ彼らの姿はとても人間らしくて、羨ましい。

ふと気づくと、窓に映る薄い自分とぼんやり見つめ合つていた。衝動的に拳を突き出し、鼻^{ガラス}つ面を貫く。

高く澄んだ音がして、俺^{ガラス}が割れた。

「 もー、駄目だよくーや！」

少し声を荒げて、一緒に歩いていたみつきがペ�り、と俺の額を

呻ぐ。全く痛くなかったけど、心が少し晴れた、気がした。

「つい

自分を壊してみれば、何か感じるかと思って。

結果はいつも通り。冷たい沈黙が、目の前を通り過ぎる感じ。痛覚はある。けれど、それに伴う一切の感情が、浮かんでこなかつた。

「清掃部の人呼んでこなきゃ……くーやも来るんだよ?」

「俺も?」

意外だ。

「当たり前でしょ! 何を始めてもいいけど、後始末はしなきゃいけないの!」

当然だ、と彼女は言った。

なら、それが当然であつてほしい、と思つた。

「……わかった。みつきがそういうなら、そうする

何も始まらない俺は、熱を感じる赤い右手を軽く振つて、廊下にぽたぽたと痕跡を残しながら行き先を変更した。

処理を済ませて、本来の目的地へ。

和に統一された部室の中央には、針金細工の聖像があつた。

その性質上耐久性に乏しく、しかし設計が余りにも完璧なのと、整備士が余りにも熱心なせいで、いつまで経つても解れることのない完成品。無駄な意匠を一切省いた機能美には、感嘆の念を抱かずにはいられない。

もつとも そんな感傷すらも、俺には無縁なんだけど。

「辻富先輩。ご無沙汰です」

古式ゆかしい和室の中心に正座するソレは、女性だつた。作品名を辻富律。着用する義務のない制服を文句の付けようがないくらい完璧に着こなしている。短く切り揃えられた流麗な曲線を描く髪は、人間的な温かさよりもしろ機械的な無機質さを伝えてくる。瞳孔は

角膜の色と同化し、どこに焦点を合わせているのかを判然としない。まるで、彼女がただ観測し、計測し、裁定するだけのモノであることを象徴するようだつた。

畳の上に凜、と正座するその姿は、初見から今まで、彼女というカタチが揺るがずにあることの何よりの証明だつた。まるで、彼女だけが、時間の枠組みから外れているような。否、というよりは意識的に逆らつてゐる、と言つたほうが近いだろうか。

故に、識別称号を『逆行天秤処女』^{ディオル・ディナ}。

何人たりとも侵すこと叶わぬ、人智未踏の絶対空域。

……まあ。最近は少し、彼女とは別の意味であんまりにも真つ直ぐな人間のせいで、少しずつながら人間味を帯びつつあるんだけど。もつたいたい。

「孔谷ですか？」

「こちらを一瞥し、当然のことと辻宮先輩は尋ねる。

「はい」

「一分の遅刻です」

唇だけを動かし、不満ではなく、事実だけを口にする。彼女の中では、俺に対する怒りではなく、俺の価値を下方修正する作業が行われているだろう。これ以上株を下げるに、ただの紙切れと同等に扱われかねない。

「すいません。道端に落ちたおばあちゃんを拾つてました」

駄目元で自己弁護開始。案外、この人にはこの手の嘘が通用します。確率的にどれだけ絶望な主張であれ、とりあえずは事実かどうか真面目に検討してくれるからだ。

「…………その人の素性は？」

「聞いてません。助けるので精一杯でした」

「あなたがその人を発見したとき、その人はどのような事態に陥つていたのですか？」

「口からタコスが溢れてました。購買の」

「…………どう対処しましたか？」

「代わりに食べました」

「…………どうなりました?」

「ハチミツレモンの味がしました」

「…………その人は助かりましたか?」

「はい。お礼に本場スペイン仕込みの「フラメンコ」を披露してくれました」

「…………証言に矛盾はありませんね」

「マジですか。

「…………あなたの言葉が本当か嘘か判断するには、情報量が不足していますので、今回は不問とします。今後は特別な事情がない限り、遅刻は控えるように」

「どうも」

「助かつた。」

さすが、学園一嘘を見破れない女。

あるいは、興味がないのかもしれない。彼女にとつては、俺が遅刻したという、その結果が全てだから。

「みつきさんは?」

「さあ。俺は知りませんけど」

「そうですか」

上履きを脱いで、畳に足を踏み入れる。辻富先輩の横顔が向かう先には、安物の将棋盤が置かれていて、ついでに、存在感を感じさせない対戦相手がいた。

「あ、五十瀬先輩」

「…………存在感が無くて悪かつたな」

五十瀬正義先輩は、いたく傷ついていた。案外ナイーブな性格らしい。どうでもいいけど。

まず目をひくのは、光沢を放つオールバックの髪型。切れ長の眉と横幅のある鋭い双眸は、意図しなくとも相手を威圧する。彼が愛用する厚みのあるオーバージャケットは、部屋の隅で衣紋掛けに掛かっていた。彼自身自分の影の薄さを自覚しているらしく、せめて外

見だけは最大限派手になるよう苦心しているのが切実に伝わってくるけれど、残念ながらまだ工夫が足りないようだつた。

さすが、《空氣真人間》。

と、辻富先輩の細指が盤外の駒を捕らえ、一本の指の背と腹で器用に挟み込み、鋭い音を立てて盤上に打ち込んだ。五十瀬先輩の顔がさらに滲くなる。

「……現状、私の相手になるのはあなたか伊賀奇創兵くらいのもので、本音を言えれば少し、食傷氣味です」

局面は、彼女の素朴で辛辣な事実に裏づけられるよう、「壊滅的だつた。

五十瀬先輩の陣形は原型を留めぬほど崩され、守られるべき王は丸裸で敵陣の真っ只中。一方、辻富先輩の王は臣下により盤石に守られ、戦場を遠巻きにして余裕綽々といった感じだ。

要するに、格が違う。

一手一手の価値の高さを競うゲームで、彼女に勝つのは困難を極める。

「ふむ……でも、ここでこうすればなんとかなる、か……？」

氣づきにくいけれど、逆転の兆しを窺わせる手が、なくもなかつた。

「……投了を薦めます」

しかし、今の一手により、もはや形勢は覆らないと確信したのか、純粋に時間削減のため、軍門に下ることを進言する律先輩。五十瀬先輩も異論はないようだ、

「……律。今日はここまでにしよう」

投了ではなく、一時休戦を申し入れた。

「……それは投了ですか？」

表情を曇らせる辻富先輩。相手の不甲斐無さよりはむしろ、曖昧な態度を不快に感じたらしい。

「……そんなことより、例の件のが大事だろ。何せ、人命に関わる問題なんだからな」

言い訳がましい」とこの上ないけれど、後半の穏やかではない台詞に気を取られる。 人命だつて？

しかし、我が敬愛する厳格な裁判長は、

「そんなことより、既に決していい勝敗を先延ばしにするのは納得できません！」

遠い誰かの人命よりも、近い勝負の決着を上位と判断した。

「……おいおい」

人間大好き五十瀬先輩、さすがに呆れ氣味。どうでもいいけど、この二人の恋人関係が何故一年も続いているのか甚だ疑問だ。裁定と博愛じや、根本的に価値観が合わないだろうに。

「大体正義、あなたは何故性懲りもなく私に勝負を挑んでくるんですか！？ 鍛錬を積んできたならまだしも、現段階のあなたと私は万に一つの勝算もないことは明らかです！」

「いや……律にだつて間違いはあるだろ。なら、根気よくやればきっと勝機はある」

「間違える！？ それは私の実力を信じていないとこことですか！ 第一、敵に同じレベルまで落ちてきてもらおうとここの魂胆が氣に食いません！ 男なら私の場所まで登つてくるくらいの漢気を見せなさい！」

「おお、珍しい。クールビューティーが顔を真っ赤にして怒つてらつしゃる。

対して、五十瀬先輩は悪い点を取つた答案について母親に言い訳する子供のように口を尖らせ、

「なんといつか……ぶつちやけるとだな、別に、勝たなくてもいいんだ」

「は？」

絶句する辻宮先輩。

「……勝負してるときの律が、一番好きなんだ」

脈絡もなく。

とんでもなく真顔で、五十瀬先輩は呟いた。

「な

スイッチ点火三秒前

「 あ、あなたは 一体何様のつもりですか——っ！？」

辻宮先輩は、一種の錯乱状態に陥つた。案外不意打ちに弱いんだよな、この人……。

と、先輩は征服の袖口から折り畳み式の銀杖を取り出し、顔を真っ赤に染め、本気で己が恋人に向けて振り下ろした。

平頭上

五十瀬先輩は、何事もないかのように軽く回遊。杖の勢いは止まらず、将棋盤どころかそれを乗せる机までもたやすく貫いた。今時こんな純情な人も珍しいけど、被害総額は現在6ヶタに届くか届かないかといったところだ。部費にだつて限りがあるので、自重してください部長。

二〇

「こんなにちわ！」ってあれ、どうしたの？」

「おこぼれも一つも」

肩を竦めて答えてから、お茶の準備を再開すると、みつきは一人のリアル鬼ごっこ眺めて「ふーん」とあうんの呼吸で状況を理解し、俺の作業を手伝ってくれた。

のんびりと雑用する俺たちを尻目に、不毛な争いは続く。
方的な攻撃

「不純です！ 不潔です！ 不謹慎です——つー」

「あ、俺は本当のことを言つただけだ！」
と云ふかそれは洒落にな

らないからしまえつて！」

まさに痴話喧嘩、ただし危険度は紐なしバンジ ジャンプといい

勝負。

本当に、綱渡りのような関係の一人だつた。

台風は無事通過しました。

「……コホン。孔谷。最近の新聞は見てますか？」

咳払いを一つ、冷静を取り戻した辻富先輩は洗練された手つきでお茶をひとすすりしてから、うつて変わつて真剣な面持ちで俺たちを見据える。取り繕え切れていないのはご愛嬌といったところか。五十瀬先輩のせい……もといおかげで、彼女という天秤は少しづつ人間味を帯びつつある。それが俺にとつていい傾向なのかどうかは、言つまでもない。

閑話休題。

「ええ、まあ」

適度な刺激は日々の糧。新聞部が運んでくるニュースは、それなりに暇潰しになる。もつとも、内容がこの学園で起きた事件なのだから、そこいらのものよりは面白いに決まつてゐんだけど。

「それじゃあ、その中で一番興味を惹かれたのは？」

「『白いあくま』改」

黙祷部期待の新人が、とうとう熊殺しの称号を得た伝説の一戦だ。

「……どうも、あなたの価値観は理解できません」

「はあ」

そんなこと言われても。

「今日の一面にもなつてたろう。『殺戮鬼再び現る、被害これで五人目』と」

「ああ……ありましたね、そんな話も」

確かに、それなりに興味をそそられる話ではあるけど。

一方的というのは、少しスリルが足りない。

結果がわかり切つた勝負なんて、吟味するに値しない。

「それがどうかしたんですか？ あれだけ派手に慣れ回つてたら、

いい加減審判部やら執行部に『保護』される時期でしょ？」

「この学園を正常の機能させるための最後の砦、あるいは治安の守り手。

規律を遵守させることを目的に動く審判部と、生徒会長の意にそぐわない行為を働く生徒を御する生徒会執行部。いくらこの学園の中でさえ抜きん出た存在でも、ここに以上、彼らには敵わない。

「それが、今度の手合いはこれまでの比ではないらしいです。ついに先日、懸賞金が掛けられました」

「懸賞金？」

そこまでの　そこまでの、異常者なのか。

過去の記録を振り返ってみても、懸賞金が掛けられるまで増長できたのは三人に満たない。

しかし、これまでだらう。

懸賞金が掛けられたということは、学園内全ての人間を敵に回したということ。ここにしかいられない俺たちにとつて、事実上の死刑宣告。

「……成る程。つまり、今日の議題は」

「ええ。元々いつか手を出そうとは思つっていましたが、こいつなつた以上、事態は一刻を争います」

辻富先輩は、音もなく立ち上がり、制服の袖口から、彼女の腕の長さほどある長杖を再び取り出し、

「　それでは。秩序を乱す不逞の輩に、せめて刹那の救済を」

銀細工を思わせる透徹の音色で厳かに宣言し、罪人に罪状を言い渡す裁判長のように、長杖を机に突き出した。

で。

律先輩は非常に単純明快な策を用意していて、計画はあっさりと完成した。けれど、さすがに日も暮れかけていたし、天候も不安定だったので決行は翌日ということになった。

「それにして……律先輩、よくやるよな……」

その内容は、誰にでも思いつくけれど、誰一人実行しそうにない類のものだつた。まず第一に相手を信用することから始まつてゐるのだから、諸葛孔明もビックリの戦略だつた。無節操な外聞や真偽の定かでない噂を判断基準として認めないと、ひるは、彼女らしいと言えぱらしいけど。

敵を信じるだつて？ なんて なんて、人間的な発想。今にも降り出しそうな薄墨色の空を見上げながら、思う。遙か向こうに聳え立つ、無機質といつては威圧的過ぎる「大な壇」を視界の端に納めながら、思う。

隣を歩く、淡々と変化する背景の一拳手一投足に一喜一憂する少女。遠辺みつきの柔らかな手を握りながら、思う。

果たして、俺は人間なんだろうか、と。

もちろん、生物学的な意味で括るならば、疑う余地はないけれど。形だつて生存可能環境だつて繁殖方法だつて、一般人となんら変わりないけれど。

恐らく最も生物と無生物とを隔てる要因となるであろう『感情』と、こうものが、一切合財欠けていいる俺は。

昔からこうだつたわけじゃあ、なかつたはずだけど。こんな歪な性質になつてしまつたのは、いつからだつたろうか？

「くーや？ ねえ、聞いてる？」

「ん。聞いてるよ

「うそ」

少しむくれたような表情で、俺の鼻先に指を突きつけるみつき。微風が耳の上で一つに纏められた彼女の髪を悪戯っぽく愛撫し、滑らかな曲線を描く。

「うん。うそだ」

隠しても仕様がないし、みつきは嘘が嫌いなので、正直に認める。細い指は俺の鼻を優しく押し、変形させた。例によつて憤りは感じなかつたけど、理不尽だと思つた。

「もー。みんなといふときはそうでもないのに、なんで一人きりに

なると無視するの？

いや、無視してるわけじゃないんだけど。

むしろ俺にとって、一番心地よい時間だ。

学校の帰り、みつきと同じ道をのたのたと歩く。

何一つ感じない非人間な俺と、一切に喜怒哀楽する超人間な彼女。
識別称号《透明な殻を嘆く雛》^{ウォンアウト・カレイドスコープ}と、《普通、^ガ普遍、故に至高原石

》。

最先端と最後端。始まらない異常と終わらない正常。混じり得ない単一と分かち得ない全一。どこにもいな無痛と、どこにでもいる鈍痛。

それが俺と彼女の立ち位置の違いであり、こうして一人が一緒にられる要因なのだ と言つたら、きっと彼女は怒るだろう。笑うべきときに笑えて、怒るべきときに怒れて、泣くべきときに泣ける。

別段特別な性質を持ち合わせているわけではなく、ただ正道を積み重ねただけで構成された彼女は、当然のよつに怒るだろう。それができる人間だから。

本当に 本当に、本当に、羨ましい。

だから俺は、彼女と一緒にいれば何か変われるんじゃないかと思つて、努力を続けているつもりなんだけど。

成果、上がらないよな……。

やつぱ、救いのかな、俺？

「そんなこと、ないよ」

……咳きが、聞こえていたらしい。悲しみを込めた声で否定したみつきは、不意に俺から手を離し、いつもの道を外れて小さな公園に入った。無言で後に続く。彼女は遊具に駆け寄るでもなく、公園の中央にゆっくりと移動し、まるで舞台の役者のように、くるり、と振り向いた。

「 孔谷透！ あなたはわたしを信じますか！？」

突然の言葉。

思わぬ事態に、思考が数秒停止した。

答えは 考えるまでも、ないっていうのに。

「ああ。信じるよ、みつき」

世界で一番人間らしいお前を、孔谷透は信じています。
だって、お前を疑うんなら。世界で一番人間らしくないこの俺は、
一体誰を信じろっていうんだ ？」

「なら大丈夫。わたしは、遠辺みつきは 孔谷透は普通の子だつ
て、とっても普通な人間だつて、知つてるから」
励ますでも慰めるでもなく。

まるでそれが当たり前のように、言つまでもなく必然のよう、
繰り返すまでもなく当然のように、搖るぎようのない事実のように。
それは、根拠もなければ突拍子もない、宙に浮いた信頼だつた。
そのあまりの儂さに、そのあまりの尊さに、彼女を直視できなく
なる。

本当 なんて眩しいんだ、彼女は。

人を疑うことを知らず、傷つけられた過去は数えるまでもなく無
数。

それでも変わらない姿勢カタチは、いみじくも命名師が称したように、
何人たりとも歪めること適わぬ原石なんだろう。

加工されることのない、始まりに始まり終わりが終わらない至高
少女。

その普遍であり柔弱であるが故の強さに、俺は憧れて。
だから俺たちは、一人で一人だつた。
今までずっと。

そして、これからも。

そう、思つていた。

第一章+箱庭には「E」の小鳥+（後書き）

第一章です。

実は、あらすじに登場する『E』というシステムは、本編の中ではほとんど語られなかつたりします。まあ、『箱庭』の中の人たちには関係のない話ですし。

そんなこんなで、続きます。

第一章+狂喜と呼ぶには純情な+

第一章 +狂喜と呼ぶには純情な+
(True VS Pure .)

2 . 辻宮律

作戦決行日、午前十時。

予定の時刻、わたしこと部長辻宮律、副部長五十瀬正義、部員孔谷透、及び遠辺みつきは、教室四つ分ほどの広さのある屋上屋上に時計塔のある普通教室棟よりは、貯水槽しかない一部活棟屋上（こちら側）を場所に指定した方が何かと都合がいいと判断で殺戮鬼を待ち構えていた。夏だというのにそれほど湿気を感じないのは、季節の変わり目に入っているからだろうか。

「……来るとと思うか？」

わたしの隣、正義が神妙に尋ねる。

作戦は簡潔に。

わたしは、全校生徒が毎日必ず見るであろう正門に入つてすぐの掲示板で、殺戮鬼に『会合』を申し込んだ。デメリットは他の報道機関系部活や無責任な野次馬に知られる事になる 実際、そこかしこに双眼鏡やら好奇心にぎらついた視線を感じる ことだが、大した障害はないので放つておく。

『……来るとと思うか？』

そう。普通の神経を持つた犯罪者なら、応じる訳がない。むしろ、応じてくれないのならその方がいい、とすら思つている。

「……来ないのなら、まだ救いがあります」

自分の罪に負い目を感じているなら。

まだ、引き返す余地がある。

だけど、もし

「あ」

孔谷が声を上げた。

刹那、巻き起こる一陣の風。

「よお。いい度胸じやねえか、女」

皿の前に、噂の殺戮鬼が立っていた。

……そうか。

ここに来た、という致命的事実もさることながら、その表情がどうしようもなく歪み切った笑顔であることで、確信する。

コレには、もう人間としての価値はないのだ、と。

「初めまして、『殺戮鬼』。定刻通りの到着ですね」

「ああ。自慢だが、デートに遅れたことは一度しかない」

抑えきれない愉悦と、抑える気のない殺氣の入り混じった鋭い眼光。

夕闇に染まるコンクリートに浮かび上がる、毒々しいまでの漆黒のシルエット。この趣味の悪い服装は、確か。

「……やはりあなたでしたか、神斜大地」

「呼び捨てとはご挨拶だな？」辻宮律

全部活中でも屈指の異常性と凶悪性を誇る、勸善懲惡 否、完全超悪を自負する黙祷部、その期待の新鋭の一。……前部長から凡その話は聞いていたものの、その限りではここまで逸脱しているとは思わなかつた。原因に思いを馳せるような無駄な思考はカットし、ただ認識を修正する。

「弁解があるなら、聞いておきます」

袖口から、愛用の長杖を取り出す。阿吽の呼吸で、隣にいた正義が紐のついた受け皿一つ、それに短い杖を差し出した。

「へえ。デかい天秤だな。それがアンタの武器か」

「質問に答えなさい！」

.....準備中の不意打ちを警戒したが、幸いなことに相手に動く様子はない。そういえば、この『殺戮鬼』の犠牲者は全員男だった。だからなんだ、で済む話だけど。根拠に乏しい憶測は、身を滅ぼす毒になりかねない。

神斜の一拳手一投足に注意を払う。と、不意に彼は

「..... そうだな。 8 0 5 8 8 2 つてとこか」

どこか聞き覚えのある数字を、順に羅列した。

「..... ？」 つ――！」

反射的に、自分の胸を抱いて後退する。

「この、この男っ！」

「な、なんで、わかつたんですか！？」

「この技を会得するのに一年掛けた」

なんて凶悪なスキル。

まさか、まさか、服の上からス、スリーサイズ見破られるなんてつ――！」

「ふふふふ、ふざけないでくださいっ！ わたしは、真剣に、」

「ふざけるだと？ その言い方こそ不遜だぜ、辻宮律。オレは今、オレが費やしてきた苦渋に満ちた1年間365日、その年月を賭けて宣言した。なら、オレの答えが正か否か、責任を持つて答える義務がアンタにはある筈だ。違うか？」

「そ、それは.....」

およそ人生の70分の1を消費して得た、努力の結晶。

傍から見ればどんなに愚かしいものだとしても、それを一概に 戯れ事と決め付けるのは、間違い..... なんだろうか。

「..... 」

「..... わかりました。あなたの主張に、軽薄さはない。わたしを賭けて、あなたの質問に答えましょ！」

「光榮だ」

.....うう。なんで、こんな公衆の面前で自分を暴かなきゃいけない

いんだろう。でも、これは……そう、真剣には真剣を以つて返すのが礼儀なんだから、当然のこと。

「答えは、」

「待つた、律」

意外な人物から、待つたが掛かつた。

「……正義？」

正義は何も答えず、神斜大地からわたしを庇うように立ち塞がつた。

途端。

「おい、男。お前、今何をしたのかわかつてるとか？」

周囲の空気が一変する。

神斜がこれまで発していた殺氣など、ほんの一端に過ぎなかつた。親の仇を、いや、それ以上の、その人物が喋るのも動くのも存在すること自体さえ許容しない、とばかりの純粹な殺意が、正義を捉える。

だが、

「お前こそ。自分が何を知りうとしているか、理解しているつもりか？」

基本的に温和で、争いごとを好まない彼が。

人に好意を向けることこそあれ、敵意を向ける方法なんて知らない筈の彼が。

振るう拳は危害ではなく、自衛を第一の信条とする彼が。

その彼が。そんな彼が。

怒つていた。

表には出さずに、水面下で。

神斜大地に勝るとも劣らないほど、殺氣を携えて。

「当たり前だ。その上で聞いていい」

「嘘だな。本当に価値を知っているなら、そもそも正確な数値なんて聞く必要もない」

「何……？」

神斜大地の顔に、初めて逡巡しきものが奔る。

「数値になんの意味がある？ 本質的な問題は、あくまで現実に触れた場合の感触であり、視覚したときの見栄えだ。そんな単純な道理さえ忘れたお前に 律の内情を、一つたりとも渡す訳にはいかない」

確かな決意を秘めた宣言。

それは、何度もかの告白。

しかしいくら言葉に偽りがなくとも、何回も繰り返せば価値が薄れてしまるのは自明の理で しかも本件においては、普段なら（不覚にも）一時に思考停止状態に陥ってしまうわたしでさえ、彼に対するある種の疑惑を拭い去ることが出来なかつた。

え、ていうか何？

体目当て？

わたしの水面下の葛藤をよそに、神斜大地は、返答にたっぷり三分弱の時間を要した。

「……ナルホド、な。どうやら……オレは、間違った形で理想を追い求めてしまつた、つづ一ことか」

その表情にふざけた様子は一片もない。本気で、己が取るべき道を誤つたことを後悔していた。

「いや、それも違う。正確なサイズが判別できるなら、その形も脳内具現化（ティック・ファンタズム）^{ミス} 律は知るよしもないが、一部男子の間で流行中の造語。別名、『大いなる妄想』）できる。お前の目指した道は間違いじやなかつたんだよ、神斜」

「……ああ。柄にもなくだが。お前には、もつと早く出会いたかつた」

「俺もだ」

当人同士にしか通じ合えない、強固な絆で結ばれた微笑。 もはや一人に言葉はいらず、沈黙すらも安穏だつた。

……どれくらい、そうしていただろうか。

立ち尽くす一人は、やがて同時に息を吐いた。

「……だから」。お前に、律は渡さない」

「……その決意、しかと受け取った。ならば、」

「勝負だな」

「ああ。勝負だ。……お前の話は聞いたことがあるぜ。」*ヒサギ*に關しては他の追随を許さない一級品だつてな」

「ここで衝突するのが当然であるように、一人は戦闘体勢を取る。「ちょ、ちょつと待ちなさい！」元はと言えば、わたしが、「アンタは黙つてな」「律は黙つてろ」

「…………はい…………」

……異様な威圧感に、思わず頷かされてしまった。

「……なんだコレ」

隣で、孔谷がわたしの気持ちを代弁していた。……えっと。わたしは、どうすればいいんだろ？　といふかどうなるんだろ？　と、そこで唐突に。

「……オレはお前を突破し、その女を手に入れん。でなければこの命、くれてやるつ」

「は？」

「この男は。神斜大地は。

命と天秤に掛けて尚、わたしが欲しいと言つた。

こんなわたしに。

こんな、デキソコナノワタシ！」

「…………」

いけない。少し、ほんの少しだけ、……嬉しいって、思つてしまつた。わ、わたしには正義がいるのに……。でも、

「軽いな」

正義の返答は、それすらも遙かに凌駕していた。

「やっぱり価値を理解してないな、神斜。命だつて？　そんなモノ如きで、律の完成されたプロポーションと釣り合いが取れる筈ない

だろうがつ！！

渤海

正義の咆哮は、遙か向こうにある落下防止用の鉄柵を容易く吹き飛ばした。……老朽化していたのが自然に壊れたのだ、と認識しておく。

「な、なんが、ううんだよ、お前はー。」

「単純な話だ。お前の命なんて貰つても意味がない。」

「単純な詰た。お前の命なんて貰っても意味がない。俺が勝った場合、終生律に服従することを誓え。お前の一拳手一投足、朝は

おはようから夜はおやすみまで、隅から隅まで徹頭徹尾、完膚なきまで余すところなく妥協も休憩も疑心もなく、お前の全存在を賭け

「ニニキテ」の用法 論考

「覚悟を決めろ、殺戮鬼。今日がお前の行き止まりだ

「新愛なる同胞よ 精々オレを憐りあせんや?」

者

け物にされてるつ！？

あなたたちは
せよ」と

タメたよ。先輩、男にはせひなあやしけなし時があるの、少こ歸らうに様子で、上かこぐらひにしだつたうを因爻一爻

あるみつも。

た
たて！ このまじやねなし
え あ あなたは女の子で

卷之三

「だつたら！」

「大丈夫。五十瀬先輩は悪いと負けます」

わたしの叫びは
単一の結果を看取る薄紅色の空に吸い込まれて
いった。

前置きの長さに反比例するように、決着は一瞬だった。

「はあっーー」「いのぉおおっーー」

両者の初動は同時、しかし明らかに速度差が。

「はぐつ！」

やはり場慣れしているのか 神斜大地の膝蹴りが、五十瀬先輩のみぞおちに突き刺さる。

「い、の、」「まだまだあああっ！」

みぞおち、みぞおち、みぞおち、下腹部、みぞおち、みぞお、下腹部、みぞお、下腹、みぞお、みぞ、みぞ、下、み、み、み……

沈黙。

……弱つ！

正義の味方、弱つ！

「……ハ。なんつーか、拍子抜けにも程があるんだが」

「あの人は防戦専門で、お前は殺戮専門だからな。相性が悪過ぎたんだ」

返事がないただの屍になつた五十瀬先輩の代わりに答える。ちなみに、律先輩は彼の余りの不甲斐なさに思考を停止して「石のよう」に固まつている。

「ああ？…………ああ、お前まさか孔谷透か？」

どうやらそこで初めて俺の存在に気づいたらしく、神斜はいたく珍しいものを見るように俺を直踏みする。

「…………お前に関しちゃあ、範疇内か外か、判断しかねるが。まあそれはさておき、だ。おい、女！」

神斜は、呆然と試合 といつよりは一方的な暴力の結果を受け入れられずにいた律先輩を一喝する。彼女はバネのように背筋を伸び上がらせた。

「な、なんですかつ！」

「勝ちは勝ちだ。約束通り……」

『 言いかけて、

ダメだよ。その子は、クーヤのお気に入りなんだから』

聞こえる筈のない距離から、何者かが愉快そうに呟く声がした。ガラスが割れたときに発せられる澄んだ音色のような声に、背筋が凍りつく。

これは ここの、声は。

「チイツー！」

最初の反応したのは俺だった。舌打ちと同時に横つ飛び、同時に

「え ？」

律先輩の体を強引に引き寄せて、地面に伏せさせる。

「 きやつ 」

可愛らし悲鳴に一呼吸遅れて。

突如、コンクリートの一角が破碎された。
まるで爆弾が投下されたように。

その跡地を探れば 強化された狙撃銃の弾丸を、見つけることができるだろう。

危ないからやらないけど。

死んだような俺とはいえ、死に対しても少し、無知であるといふ点において、恐怖がある。

「あのアマア……悪同士仲良くしようつて言つてたクセに、やめことやつてくれんじやねえか……」

俺たちには窺い知れぬ事情があるらしい、放たれる弾丸をお互い打ち合わせているかのように次々と回避しながら、神斜は恐ろしく歪んだ形相で向かい側の校舎、その頂点に聳える時計塔を一瞥する

と、俺たちに向直り、

「邪魔が入った。報酬は後だ。じゃあな」

手短に別れの挨拶を済ませ、颯爽と屋上から飛び降りた。

「……つて」

自殺志願者？

銃撃が止んだことを確認してから起き上がり、神斜が去った先を見下ろすと、すでに彼の姿はなかつた。すぐ下の階の窓が開いているから、多分そこに入つたんだろうけど、少なくとも人間業じゃない。

「……あんなのばっかいるから、ウチの学園が異常視されるんだよ

……」

俺たちはただ、ほんの少し、世界に馴染めなかつただけなのに。みんな、いいヤツなのに。

人間がどうかは、別として。

「で……見返りはなんだ？」『翡翠』^{ルスイ}

神斜が見ていた方向に向けて軽く声を飛ばす。ややあって、『べつにー。今回はただの気まぐれだよ』

まるで普通の距離で会話しているように、声が返ってきた。仕組みは未だによくわからないけど、相変わらず便利な体だ、あいつ。その気になれば、俺が校内のどこにいても会話が出来るだなんて。

「今回も、だろ？」

『むむ、そんなことないよー。わたしつてば基本的にビジネスライクなんだからねー？……クーヤたちを助けるのは、別に、その、』

「はいはい。後で時間作るよ。それでいいか？』

『……うん。ありがと、クーヤ！好きつ』

「どうも」

交渉終了。

相変わらずいい性格してるな、あいつ。

臆面もなく人を好きだなんて、恥ずかしい。

そして、……羨ましい。

「……孔谷。とつあえず、わたしは正義を保健室に運びます」

「あ、手伝います」

「いえ。単純に腕力で言えばわたしの方が上ですし。それに、無意味に人を待たせるものではありません。相手が大事　　いえ、危険であればあるほど」

「……そうさせてもらいます」

さすが律先輩。どちらが大事か、よくわかつてらっしゃる。

「みつきはどうする?」

ぼんやりと空を眺めていたみつきに声を掛ける。彼女はゆっくりと振り向いて、少し思案顔になつて、

「ん~~……わたしはいいや。その辺のブンヤさんに感想でも聞いてくるね」

「そつか

まあ確かに、彼女にとつては進んで会いたいとは思わない相手だしな。

「それじゃ律先輩……生きてたら、また会いましょう」

俺は、覚悟を決めて校舎内に降りる階段に向かって歩き出した。

俺の中の、誰かを好きになるために必要なこと。

尊敬できる」と。

他にはないものがある」と。

受け入れる価値があること。

受け入れてくれる余地がある」と。

地球人であること。

人殺しではないこと。

「だから俺は、お前を好きになれないよ。何一つ一致してないお前

翡翠とはな

『あ、失礼しちゃう。いくらなんでも異星人はないんじゃない？せめて異邦人くらいにしてよ』

『冗談。世界の他の誰にだって、お前の隣には並べないよ。夢の終

わりが憧れに殺されることだなんて、絶対理解できない』

職業、『スケーブゴート極悪人』。

命名師が名付けて曰く、『先天的悪性子女』ワースト・ワン。

それが、この学園セカイでの彼女の記号だ。

『終わるんじゃないよ、完成するの。……そんなにおかしいかな？わたしの考え方』

「考え方というよりは、生き方かな」

『……ねえクーヤ？』翡翠は、寂しげに笑っているのかも知れない。

『ほら、映画だとよく宇宙人が攻め込んでくるじゃない？こう、

オバーテクノロジーを駆使してガーッと』

「……まあ、あるかと聞かれれば、あるね」

『でさ、あれって大体今までいがみ合つてた大国同士が手を組んで力を合わせて解決！ そして大団円！ って感じで終わるじゃない』

？わたし、あれってとっても合理的な方法だと思つの』

「合理的、ねえ……」

敵を欲しがる人間に、淘汰したがる人間に、駆逐したがる人間に、人類共通の敵を用意してやる。

例えば、世界を人間という種の枠組みで限定するのなら。世界平和を達成するには、この方法が一番手っ取り早いのかも知れない。

「でも、それだって一時的なものだろ？ 少し時間が経てば、結局元の木阿弥になるに決まつてる」

『終わらないものなんてないんだよ、クーヤ。だったら、価値を時間の長さで否定するのはなんだか違うと思つ』

『じゃあ翡翠は、一秒だけ幸せにする代わりにお前の寿命を五十年減らす、って言われたら幸せを取るのか？ 今すぐ死ぬ代わりに五秒だけ律先輩の体を好きにしていいって言われたらそうするのか？』

『するよ』

即答。

俺の極端な例え しかも後半は個人的な希望 に対し、翡翠は、間髪入れずに肯定した。

ああ。やつぱりこの女、狂つてゐる。

今更だけど。

俺たちもだけど。

「……そつか」

『ところでクーヤは、好きな子とかいる?』

「脈略もクソもないな」

「いいじゃん」

よくなない。

「……別に。そういう浮いた話は、ないけど」

『どうして?』

「どうしてって……こういうのは、人それぞれ時期つてものがある

から、別に急かされる必要もないというか、なんというか、『

『ふうん。じや、クーヤはその内誰かを好きになれると思つてるんだ』

あからさまに棘とげのある物言いだった。

みつきには放てないだろう、優しい毒を孕んだ率直な言葉。

「なんだそれ。それじゃ、まるで」

俺が、誰も好きになれないみたいじゃないか。

俺が、誰にも 興味がない、みたいじゃないか。

『違うの?』

翡翠は、聞き分けのない子供を諭す母親のように、俺の内心を見透かしたかのように、微笑したのかも知れない。

「違うよ、全然。律先輩のことは尊敬してゐるし、みつきは放つておけないし、五十瀬先輩は…………とにかく、それは違う」

『あのね、クーヤ。《尊敬》や《心配》と、《親愛》や《憎悪》は全然別物だよ?』

「 そ う か ？」

『 前者はね、その人の情報を統合しての、総合的な評価。極端な話、機械にでもできる簡単なコトなの。でも、後者はそつじやなくて、その一段階上にある 積極的な、自分の中から外に出す、自分だけの意思』

『 彼女の人格は希少価値が高い』。

『 彼女の行動には警戒が必要だ』。

それは思うというより、判ずるだけの行為だ、と。

一切の評価を切り捨て、感情だけで生きている彼女は、断ずるのではなく、ただ当然のように言った。

そんなことは、当たり前だと。

そんなこともわからないあなたは わたしとは違う意味で、人間じやないんだよ、と。

「 ……違う。俺は」

『 なら聞くけど。クーや、嫌いな人いる？ 自分以外で』

「 ……先手を打たれた。

「 ……別に、いなideど」

お前以外。

『 不気味』

「 つるさい」

『 異常だよ』

『 余計なお世話。なんだよ、嫌いな人なんていない方がいいに決まつてるだろ』

『 それ、世界が平和な方がいいって言つてるのと、敗者なんていい方がいいって言つてるのと同じだよ？』

つまりは、理想論。

通常ではありえない筈の心境に、無論望んだ結果ではなく、無造作に感情（人間らしさ）を磨耗し続けた末に、俺は達していた。

それは錯覚か。

あるいは、欺瞞か偽善。

『もう十六年も生きてて、しかもこの学園で、嫌いな人がいない？おかしいよ不気味だよ異常だよ狂ってるよ人間じやないよ大好き！』

「…………頼むから翡翠」

文脈を大事にしてくれ。

だからこの女は 嫌いなんだ。ホントに。

4・遠辺みつき

クーヤと別れてから三十分後。
わたしは、とある部室のドアを軽くノックした。

「ようやく来たね。待っていたよ」

軽い材質で作られた銀色の扉の向こうで、幽霊みたいに現実感のない声が応える。

「おじやましまーす」

勝手知つたるなんとやら、迷わずドアを押し開け、侵入。果たしてそこには、

「やあ、みつき君。……へえ、珍しいね。今日は一人かい？」

宇宙の天幕を貼り付けたみたいな深い藍色の長髪。奥底まで見透かされそうな透明感のあるスカイブルーの瞳。絵本の中から抜け出てきたような輪郭の曖昧さを持ちながらも、すこく存在感のあるその人 新聞部部長、伊賀奇創兵いがき そうへいは、舞台の役者がするように笑顔を作った。

「あ、よくわかりましたね」

「そりゃあ、かれこれ一年の付き合いだからね。それで、さつきの茶番劇について僕に感想を尋ねに来た、と言つたところかな？」

「あちやあ……読まれてますねー」

相変わらず、いつも先のことを考へてる人だなー、と思つた。

今日も興味深い声帯だね、という伊賀奇さんのよくわかんない歓迎の言葉をもらいながら、一昔前のオーラが出ている木製のイスに座る。

「それ以外に理由がないからね、単純な消去法さ。……そうだね、一言で言えば……」伊賀奇さんは、数秒腕を組んで考え込んでから、「全体的なバランスはともかく、部分的な突出度に関しては茂花君の方に軍配が上がる、とだけ言つておこつ

「はあ…………」そう、なんですか？」

「うん。間違いないね」

真顔で断定された。

「そうなんですか。

「えつと……他には？」

「他に、だつて？ おかしな事を聞くね。先の決闘の中での一番の論点についての言及を終えた今、僕が語るべき事なんてもうほとんど残されちゃいないと思うけれど？」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「………… わかつたよ。僕の根気負けだ。割と真剣な意見ではあつたけれど、より君の要望に添つた意見も述べる。それでいいんだろう？」

「はい。お願いします」

伊賀奇さんは、君は言動の割に冗談が通じないんだつたね、と咳いてから、回転式の椅子の背もたれに深く寄り掛かった。

「…………まず、連續殺戮鬼の正体が神斜大地だつて点に関しては、一部の 生徒会執行部、あるいは黙祷部に縁のある生徒なら知りえた情報で、当然僕も知つていたから、特筆すべき事ではない。そもそも、何もかもが異常なこの学園でさえも、人を殺めようだなんて考える輩は と云うより、人にそこまで積極的かつ明確な意思を持つる人間は、そんなに多くないし、ね」

例えば、単に世界が好きだけの君や、単に世界で楽しむのが好きなだけの僕とかじや無理だよね、と伊賀奇さんは皮肉げに笑う。失礼な発言だと思って頬を膨らませて抗議したけど、いつものように軽くスルーされちゃった。むー。

「まあ話を戻すと……実際のところ、彼を捕まえる事はそこまで難しくないんだよ」

「え？」

予想外の言葉に、思わず声を上げてしまった。

だつて、捕まえられないから、まだ逃げてるんじゃ……？

「えっと、……どういうこと、ですか？」

「つまりね。あの『逆行天秤処女』^{ディオル・ティナ}が考えつく程度の策、僕や『不朽夢想』^{ソック}あたりが思いつかない訳がない、という事さ」

「ウソツキ……誰でしたっけ？」

「おや、不勉強だね」

いちいち命名部部長さんの付けたちょっとイツチャッてる感じのネーミングを覚えてるのは、この人とくーやぐらいだと思いまス。でもある人美人だから人気あるんだよね……別にいいけど。わたしにはくーやがいるもん。

「元審判部部長、現黙祷部副部長だよ。彼はどうせ身内の不始末を見ていられないタイプだから、その内しゃしゃり出てくると思うよ」でも間が悪い人だから、今回は出番無しかもね、と伊賀奇さんは心底愉快そうに付け加えて、くくく、と苦笑した。

「ああ、あの人かー」

学園年長者の中でも、一番オジサンっぽく見える人。

確かに、昨年度ベストオブジエントルマン賞を受賞してた気がする。

「え、でも身内つていつも……犯罪した人なのに？」

もう、部活仲間どころの騒ぎじやないのに。

まだその人を、仲間だと思ってくれてるの？

「ああ。だからこそ彼は、ここに来たんだから、ね」

諦観めいた皮肉げな笑みと一緒に、伊賀奇さんは肩を竦めた。

『だからこそ、彼はここに来た』。

この、世界から切り離された「つら、わたしたちの世界そのものになった、この学園に。」

「……なんでなのかなあ」

床に田を落とし、思わず愚痴つてしまつた。

「ん？」

「なんで……こんなに、みんな、上手くいかないのかな？」

みんな、田指して道は同じなのに。

ただ 幸せになりたい、それだけなのに。きつと、罪を犯した人だつて、元を辿れば。

「そりゃあ、皆が、皆の幸せを願つているなら上手く行くだらうけどね。生憎、大抵が望むのは自分の幸せだけだからね」

伊賀奇さんが出した回答は、彼の話にしては珍しくわかりやすかつた。

でも でも。

「……でも、や……」

それならさ。

みんなが、他人を自分のように思えればいいと思うのは、わたしだけ……なのかな。そんなことないと、思うんだけど。

「……まあ、辛氣臭い、とか詮のない話はそのへりこでしておこう。あんまり愉快じゃ ないし、興味ないしね」

伊賀奇さんは、手で弄んでいた飴（いぢ）ミルク味）を口に含み、舌で転がしながら器用に語る。

「結論からいうとね。元々、生徒会執行部に学校の治安を守る氣なんてこれっぽちも無いのさ。あるのは、生徒会長、つまりこの学校の最上位統治者の彼女を守るの」この意図だけで、ね

「……そう、なんですか？」

「当たり前じや ないか。もつとも、本氣で治安を守るのと思つたらそれこそ生徒全員を個別に隔離ない殲滅しないといけなくなるだろうから、僕としてはありがたい姿勢ではあるけれど」

「…………」

それは 当然過ぎて、認められない事実だった。

だつて、元々、わたしたちは。

その枠組みから逸脱したからこそ、ここに送られてきたんだから。「連續殺戮鬼の被害にあったのは、全て屈強の男子生徒だ。それだけじゃ判断はできないだろうけれど、彼の、神斜大地とそれなりに深くコンタクトを取った事がある人間なら、彼が或華君以外の女性に手を出さないであろう事くらい見当はつくさ。少なくとも、今之内はね」

そして生徒会長、兼理事長は、女性。

だから 彼がどこで誰を殺そうと、少なくとも彼女は、標的にはならない。……そう考へてる、ってこと？

「あれ？ でも、さつきの戦いのときは？」

いつせ一先輩が代わりにやらなかつたら、律つかやん先輩が殺戮鬼さんと戦うことになつてたような。

「女性を倒す手は、何も暴力だけじゃないよ」

ふふん、と不敵に笑う伊賀奇先輩。……なんとなく身の危険を感じるので、用事を思い出したコトにする。伊賀奇さんは、わたしの嘘を多分見破つた上で、そりやあ残念、ととても楽しそうに別れを惜しんだ。

ドアを開けて去る間際、

「…………これから、どうなるんでしょう」

何気なく、一番聞きたかったコトを、独り言のように聞いてみる。「さあね。形あるものはいずれ壊れ、命あるものはいずれ失われる。なるようになるだろうに、ならないときはどうしようもない。そして僕は傍観し諦観し、観客として嘲笑する。それだけの事さ」

振り返らなくてもわかる、いつものような憂いを帯びた微笑で、伊賀奇さんは即答した。

「 目が覚めましたか」

「 気がつくと、物凄く仏頂面の律の顔が間近にあった。

「 くつ 僕は、 負けたのか？」

確かに、両者一步も譲らぬ一進一退の白熱した攻防戦の末、お互に死力を尽くした最後の一撃をぶつけたところまでは覚えているんだが.....。

「 はい。それはもう、完膚なきまでに」

「 いや、後少し俺の攻撃が深く入ってれば」

「 あなたの攻撃なんて一度も観測できませんでした。ああそれとも、敵の膝蹴りを鳩尾もしくは下腹部で受ける行為をあなたは攻撃と呼ぶのですか？」

それならたくさん攻撃してましたね、と律。 心なしか、言葉の節々に棘があるよーな。というか、一人きりなのに敬語なのは明らかに怒っている証拠だ。本人は自覚していないが。

「 悪かったな。カツコいいところ見せられなくて」

「 つ、違うでしょーー？ そんなことよりも、そんなことよりも

「 なんであなたは、あんな無謀な賭けを承諾したのよー！」

したのよ、たのよ、よ、 見事なハウリング。

「 いや。それは、その」

「 その？」

「 お前の価値をわかつてくれる人が他にもいるんだなあ、つて思つたら嬉しくなつちまって、つい」

調子に乗つてしまつたというか。

その結果が どうしようもなく無様な負け、か。

言い訳のしようもないでの、「ごめん！」と真っ向勝負で土下座する。

「 」

しばらぐ、律の反応はなかつた。顔を上げるわけにもいかず、ひ

たすら沈黙の痛さに耐えていると、

「……わたしに、そんな価値があるとは思えない」

不意に、ぽつりと声が漏れた。

「……え？」

恐る恐る顔を上げると いつになく弱弱しい、ともすれば泣き出しそうな律の顔が、そこにあった。

「……わたしの体が、比較的恵まれているものである」とはわかります。でも、裏を返せばわたしの価値はそれだけで 別に、あなたが体を張つて守る意味があつたとは、思えない

「律」

まるで、自分を物のように。

そこら辺に置いてある置時計ぐらいいの物と同列に並べて評価し、律は困惑していた。

まるで それが、当然であるよう。

「……それとも、男子にとつて女子の体はそれほど価値のあるものなの？」コレは、あなたが傷ついてでも

「もういいよ」

思わず 彼女を、抱き締めていた。

「あ

伝わつてくるのは、彼女の鼓動。

とくん、とくんと。規則的だけど、でも、確かに生の温かさを秘めた柔らかい音だ。

それだけで、もう充分。

「……お前が、自分をどう思つてるかなんて知らないけどな。俺は、俺なんかよりも、お前が一番大事だよ。それは体型とか顔とかの問題じゃない

顔でも形でも声でも性格でもなく。

ただ そうやって、物差しにしか、天秤にしかなれないお前を。せめて俺が、守つてやりたいって、思つたんだ。

「好きなんだ。お前が

余計な言葉はいらない。

ただ、彼女を強く感じている今は。

「…………本当に、わからないよ。正義の言つてること。正義が考
えてること」

どう評価すればいいかわからない、と律は嘆く。
その考え方は、きっと変えられないんだろう。

なら、それでもいい。

どんな律だつて、俺は受け止めてみせる。

「いいんだつて」

「…………ねえ。それじゃあ、さ」

不安げに肩を震わせて、律は小さく、咳く。

「おう?」

「あなたがいうことが本当なら。……もし、わたしが死んだら。もし、わたしの心がなくなつて、体だけになつたら、」
「ちゃんと、わたしを捨ててくれるの?」

「ただの体^{モノ}には用はない、つて。

「…………ああ。それで、お前が救われるなら
辻富律は、確かに誰かにとつて大切なもの ではなく、大切な
人だつたんだ、と。

頷いて、くれるなら。

「…………でも、死ぬとかいうなよ。次言つたら怒るからな」

「…………ええ。ごめんなさい、正義」

俺たちは、しばらくそのまま。

お互いが生きていることを、ゆっくりと確かめ合つた。

次の日。

辻富律は、ただのモノになっていた。

第一章+狂喜と呼ぶことは純情な+（後書き）

ブローケン子大集合。

ちなみに、『世にも奇妙な或華さん』に出てきた神斜君と或華さんも登場しますけど、まあ、バックボーンは同じですけど、違う世界の住人だと思って下さい。平行世界、みたいな。

第三章 剥ぎ取られた雛の殻

第三章 剥ぎ取られた雛の殻
(or bloodshed .)

6. 孔谷透

翌日。

「んー、ねーむーい……」

「仕方ないだろ。律先輩直々に呼び出されたんだから」
休日の朝八時ごろ。俺とみつきは、部室を訪れていた。

「律先輩、いますか？」

軽くノックしたけれど、返事はない。少々の違和感を感じながら
も、スペアキーで鍵を捻り、ドアを開けた。

回想。

『でもさ。クーヤの理想が高いのはわかつたけど。仮にそんな子が
現れたとして クーヤは、その子を好きになれるのかな?』

翡翠は、尋ねるというよりからかうような声色で聞く。

「…………そりやあ……なれるんじやないか?」

まだ見たことはないからなんとも言えないけど。

『みつきちゃんは?』

「みつき?…………ああ、確かに」

他にはないものがある』こと。

受け入れる価値があること。

受け入れてくれる余地があること。

地球人であること。

人殺しではないこと。

確かに、彼女は 翡翠の、遠辺翡翠の双子の妹、遠辺みつきは、条件に一致する。

「……そうだな。あいつなら、好きになれるかもしねー」

『無理だよ』

即答だった。

「またかよ。……ああ、確かに俺は、他人に対して感情が湧かないかもしれない。お前に言わせれば興味もないのかもしねー。でもそれって誰だつて多かれ少なかれそういうものだろ？ 今は駄目でも、時間が経てば少し気持ちつてヤツが芽生えてくるさ」

多分。

『そろかもしないけど……でも、いきなり愛情つていうのはハードルが高すぎない？ 卵を割らずに中身を食べるのくらい難しいよ？』

……というか、不可能だろ、それ。

『……感情に、簡単も難しいもあるか』

『あるよー。人を恨んだり嫌いになるのは簡単だけど、人を好きになるのは結構難しいの』

理由がいるからね、と付け加えた翡翠の声は、彼女らしくない淡淡とした抑揚のないものだつた。

『でもまずクーヤは、他人に興味を覚えるコトから始めるだね。そうだねー……誰かに何かスゴイコトをしてもらうとかどう？ なんだつたらわたしが

『遠慮しとく』

即答だった。

「ハ。確かに、凄いことだけじ、セ……」
「まさか、ここまでとは。」
律先輩、気合入れすぎです。

「…………」

部室の中央。

辻富律は モノになつてもなお、天秤を保つていた。

昨日と寸分変わらぬ 否、一手進んだ局面の、将棋盤を前にして。

昨日と変わらぬ服装で、昨日と変わらぬ体勢で、昨日と変わらぬ
凛然さを湛えて しかし。

その腹には、不似合いな銀色のナイフが。

「冗談のよつに。」／「冗談のようだ。」

まるで、一繋がりの創造品。／まるで、一夜限りの悪夢。
彼女はそこにいて、／彼女はそこに亡い。
顔色さえ変えずに、／景色さえ眺めずに、
目を瞑っている。／死を綴っている。

「 律、せんぱい」

閉じたドアに寄り掛かつて、平衡感覚を確かめる。

驚きはない。けれど、不可視の衝撃に身体を殴られたようだつた。

「律つちゃん先輩！」

隣にいたみつきが、弾かれたように律先輩に 否、だったモノ
に駆け寄る。気づけば、彼女は小さな赤い池の真ん中にあつた。

「くーやー 保健室長さん呼んできてー！」

みつきの叫び声が妙に遠く聞こえる。
だから、無理だつて……。

ソレはもう、終わつた後のモノだつて。

せめて せめて、静かにしておいてやれよ。

もう、そつとしておいて「早くー！」

乾いた張りのある音。

一呼吸遅れて、焼け付くような痛みに、頬を叩かれたのだ、と気づいた。

見れば、みつきは瞳いっぱいに涙を溜めて、体を震わせ、今にも崩れ落ちんばかりだつた。

それでも、まだ。

辻富律の生を、諦めていない顔だつた。

「悪い。行つてくる」

「うん」

部屋を飛び出したのはいいけれど、保健室は別棟の一階だから、ここからだと大分距離がある。校内での携帯電話の使用は禁止されていなけれど、俺は持つていない。まあいざとなれば翡翠が、

「つて、そうか。翡翠、聞こえるか?」

『なーに?』

……やはり、聞こえていた。どうも、この校舎で、否、この学校で発生した全ての音は、彼女の聴覚から逃れられないようだつた。あるいは、別棟の地下部屋周辺なら大丈夫かもしれないけど……。『……律先輩が、死……にかけてる。誰でもいいから、保健室関係の人を連れてきてくれ。あと、五十瀬先輩にも』

『死にかけてる? 死んでる、の間違いじゃなくて?』

……やっぱりそうか。

彼女は、学校中に存在するあらゆる音を拾い集める。

ならば、律先輩の心音の有無など、手に取るようにわかるのだろう。

『……それでも一応、さ。頼むよ』

『うーん、いいけど……』

『後で時間作るよ。一人きりで』

『』

瞬殺だつた。……現金なやつ。

戻ると、みつきは血だまりの中でもうずくまっていた。腹部から下が赤にまみれた律先輩は池から離れた床に寝かされていて、それだけなら、それだけを見れば、彼女はまだそこにはいるようだった。

「……呼んだよ。そのうち来る

「……つ、ひつぐ、ふあつ、うううつ、…………！」

赤い水面に落ちる波紋が、弔いの雨。

レクイエム

胸を締め付けられる悲痛な泣き声が、鎮魂歌。

震える彼女のぬくもりが 最後に感じた、人間の温かさ。

およそこの世界にある最上級の葬送式を以て、辻富律の死没は受

理された。

「……つは……」

不覚にも。

感情だなんて上等なモノ、とつぐにおかしくなってしまっていた筈の俺でさえも。

この光景には 羨望を感じずにはいられなかつた。

なんて なんて、うらやましい。

もし俺が律先輩で、みつきが来るまで意識を保てていたなら。

間違いなく、笑つて避けただろう。

間違いなく、安らかに避けただろう。

……帰納法にしろ演繹法にしろ、人は必ず死ぬといつのなり。

きつと、ヒトは死んでこそ己が人間であることを証明する。

その幕切れを、こんな形で迎えられるなんて。

「……ありがとうございました、律先輩」

どうか、そつちでもお元氣で。

俺も、そのうちいきますから。

「……つ

私がその場所に着いたとき、既に全ては終わっていました。

8 · 葉月茂花

「……どうも」

「……っひつ、ひうつ、うつ……」

一人　じゃなくて二人の前には、胸の前で両手を組んだ少女の姿があつて。その顔は蒼白といつよりも、あらゆる穢れが祓われた後のように、高潔に見えました。

「……失礼しますね」

イヤな臭い　何回経験しても慣れない　のする小さな泡をよけて、少女の元へ。……腹部の傷の深度を見る限り、どうしようもなく手遅れだつたけど、僅かな希望に縋つて、呼吸、瞳孔、発熱、動脈を淡々と調べていきます。

「でもやつぱり、少女は、もつ。

「…………」
息を呑んで私を見守る一人に、少しためらつてから、無言で首を振りました。

「……そう、ですか」

少女を運んでくれたんでしょうが、制服を血塗れにした男子の声
孔谷さんが、静かに呟いて、頭を下げました。もう一人の方は、みつきさんは何も言いませんでした。

「…………ここからは、私の　私たちの管轄です。この子は、私たち
が責任を持つて保護します。……それで、いいですね？」

「…………言わなきやいけないことですけど、目の前でたつた今親友を
「」の世界では、何より大切なものを失つた彼女たちの気持ち
を思うと、胸が痛みます。

私は、こんな犠牲を出さないためにここにいる筈なのに。
またひとつ、何もできずに大切なものを失つてしまつた
と、その時、

「律つ……」

大きな音と共に、一人の男子が現れました。このオーバーコート
と斑鳩さんに似た不良っぽい目つき、でも何故か存在感のない彼は
確かに、彼女の恋人さん……名前は五十瀬さん、でしたっけ。

「おい、孔谷！ みつきでもいい！ 教えろ、何があった…！」

私を無視して、他の誰も目に入らないというように、五十瀬

さんは物言わぬ少女を抱き締めました。でもその抱擁は一方的なものでしかなくて、少女は力なく首を傾げました。

それでも五十瀬さんは、少女に残っている魂をひとつ残らず慈しむように、しばらくそうしていました。…私に、一人の間を別つ権利があるわけもなく、彼がゆっくりと体を離すまで、目を伏せていました。

「……孔谷。後は頼む」

壊れ物を扱うよりも丁寧に、五十瀬さんは少女を床に横たえ、最後に額に軽く口付けすると、すぐ後ろでその一部始終を眺めていた

呆然としているというよりは、観察していると表現した方がしつくりくる無感情の視線で、孔谷さんの肩を拳で軽く叩きました。

「先輩は？」

「当然 殺戮鬼に、復讐だ」

殺戮鬼？

それって、今巷を騒がせてる連續殺人犯のこと ？

「ちょ、ちょっと待つて下さい！ 事情は知りませんけど、その、復讐なんて、そんな 」「わかつてますよ

私の言葉を穏やかに遮つて、五十瀬さんは自嘲気味に苦笑しました。

「……いや、実際はこれっぽっちもわかつてないかもな。律との約束 開始一分で破るわけだし」

……そこにどんな葛藤と苦悩と逡巡があつたんでしょうか。

五十瀬さんは、せめて涙だけは流さないよつに、不自然なくらい目を細めて、笑顔でいようと努めながら。

「でも、無理みたいだ。例えどんな姿形になつても、彼女がどう思つたとしても 五十瀬正義は、辻富律を愛してる」

そう言ってから、五十瀬さんは場の沈黙にいたたまれないものを感じたのか、少し顔を赤らめて照れを隠すように頭を搔きました。

「……柄じゃないな、つたく。……死体は、見晴らしのこじらりにお願いします。こいつ、高い所好きなんで」

「あ……は、はい」

「それじゃ」

五十瀬さんは軽く頭を下げて、早足で部屋を去りました。

「……相変わらず、身内を疑わないんですね……」

壁に寄りかかっていた孔谷さんが、ぽつりと呟きました。その言葉を吟味して、私はようやくことの次第を少しだけ理解しました。

少女　辻面さんの死因は、多分ですけど、多量の出血によるもの。

ナイフを腹部に刺したのが彼女自身か、それとも別の誰かかは指紋鑑定をしてみないとなんとも言えないけど、少なくとも五十瀬さんは殺戮鬼さんの仕業だと思つた。……そういうことなんでしょうね。

「じゃ、後はお願ひします。俺は、みつきを休ませてくれるんで」

「あ、はい。保健室なら、比奈ちゃんか初音さんがいると思ひます」「どうも」

孔谷さんは、行くよみつき、と軽く声を掛けて、和室の中央で眠る少女に一瞥も一礼もせず、演劇を見終えて満足して帰る客のよう

に、一人で退場しました。

9・遠辺みつき

鏡に映るわたしは、あかいあかい血に塗れて、寂しそうに笑つてゐる。

出血は両耳から。頬を伝う生々しい赤が、まるで血でできた涙みたい。

もうすぐ光を失うだらう瞳が捉えるのは、もうひとりのわたし。立ち竦むもうひとりのわたしは、何かを必死に叫んでいる。

「…………で…………んで！」

「……なんて言つてゐるんだらう？　耳を傾けてみると、少しだけ音が大きくなつた。

「……なんで！　俺は、俺はそれでも遠邊の」と

「　もつ遅いよ。あなたにとつてのわたしは、今ここで死んだんだから」「…………」

ああ、わかつた。

これはそう、わたしが生まれた日の

「　っ！」

滅茶苦茶に抗つて、無理やり夢から逃げ出した。

「……あたま、痛い…………」

「」の夢を見たときは、いつもこゝだつた。

覚えのない記憶、感触のない映像。

まるで、自分の中に知らない人が居座つてゐるような気持ちの悪い人に、律つちやん先輩の綺麗な死に顔が重なつて、地球がぐるぐる回つて胃の中にあるものを吐き出しそうになる。

「大丈夫？　ひどい顔してゐる」

横からの声で、ようやくそこには人がいることに気がついた。

意志の強さを感じさせる切れ長の眉。凜とした双眸が、どつちが病人のかわからないくらい心配そうにわたしを見つめている。ちよつと見ただけだと肩に掛かるくらいの長さの短髪だけど、よく見ると腰の後ろから束ねられた髪がのぞいていて、相当の長髪であることが分かる。

「えつと……」

「あ、ごめんごめん。わたし、比奈。朱野原比奈。保健委員じゃな
いけど、葉月先輩に頼まれてお留守番中なのです」

「へ、へー、そなんだ」

すぐ屈託のない笑顔で、比奈ちゃんは笑う。普段のわたしならすぐ仲良くなれそうだったけど、体調不良のせいか、あんまり上手に調子が合わせられなかつた。

「でも、まだ横になつてた方がいいよ。なんかもー……なんていう

か、魂が半分抜けちゃつてゐるみたいな顔してゐるもん」

「あ、ははは……」

……わたし、そんなひどい顔してゐるのかなあ。

魂が抜けてるみたい、かあ……。

「あ

そこで、ようやく。

律つちゃん先輩の死を、直視した。

「…………あ、は、はははは……」

そつか。

あのひとは、もう。

いつも厳しくて時々優しかつた、凜々しくて時々かわいかつたあのひとは。

もう、この比奈ちゃんみたいに、笑うことができないんだ。

「……ごめん。ちょっと、ひとりになりたいかな」

なるべく平氣を裝つて、律つちゃん先輩にしかられないよう、元気一杯の笑顔を作つて言つた。

「…………うん。気分が悪くなつたら、言つてね」

きつと見抜かれてるけど、比奈ちゃんは何も言わずに席を立ち、カーテンを閉めてひとりきりにしてくれた。

……そういえば、一人きりの寂しさを感じるのは久しぶりだ。

学校にいるときはいつもくーやが一緒だし、くーやがいないときは律つちゃん先輩やいつせー先輩が構つてくれた。だから孤独を感じることはなかつたし、笑顔が絶えることもなかつた。

でも、今はひとりぼっち。

ひとりはいやだ。ひとりになると、すぐに悲しくなつて、泣きそうになる。わたしというカタチを保てなくなる。

「……くーやの、ばか」

わたしたちは、二人で一人なのに。仮にも病人を放つておいて、一体どこに行つてるんだか。

色々な感情がごちゃまぜになつて、少しほんやりしてきたから、涙をこぼさないように固く目を閉じて、布団を頭の上まですっかり被つて、ひとまず考えるのを止めるにした。

……神様がいるなら。せめて今だけは優しくしてくれてもいいのに。

「犯人は誰だ？」

『殺戮鬼』

即答だつた。

……別に、俺の人生が誰かによつて書かれた一編の小説だなんて言つつもりはないけど、万が一推理小説か何かだとすれば、台無しだと思つた。

「……でも、だとしたらおかしくないか？ 律先輩は女なのに」

『そう？』

殺戮鬼は男しか狙わない。

それはヤツがフェミニストという理由からだけではなく、単純に男の方が戦い甲斐がある人間が多いのと、

“『だつてあの子、アルカちゃんにぞつこんだもん。初めての人は彼女がいいつてさ。かーわーいいー』”

過去の翡翠の話によれば、確かに彼にはお田舎ての女子がいるんだつたか。

「ところで、アルカさんについて、教えて欲しいんだけど

『かえら あるか
還界或華』

異端を狩ることで正常側であろうとする審判部に相対するように、異端を屠ることで異端中の異端であろうとする黙祷部の長。年は

確か、俺より年下。識別称号、《白いあくま》。由来は、日光ある

いは月光を浴びて白銀に光る、ウェーブの掛かつたボリュームのある銀髪から。ちなみに、あくまがひらがなのは、命名部部長曰く

「……大人の事情」だとか。

『んー……いくらわたしでも、心の中までは聽けないしなー。書類上の情報以上が欲しいんなら、伊賀奇さんに聞いたほうがいいかも』

明らかに嘘だった。

意識しえない生理現象は、時として本人すら把握していない自己を浮き彫りにする。

要するに……話すのが面倒だ、つてことらしい。

この気分屋め。

「伊賀奇先輩、ねえ……」

あの、みつきがお気に入りの偏屈オヤジ、か。

個人的には、進んで関わり合いになりたいタイプじゃないんだよね……。

裏表のある人間は、好きでも嫌いでもないけど、少し鬱陶しい。

『それにあの人、葉月先生と、……あー、うー、その、アレな関係だから、色々聞かせてくれると思つよ』

「……なるほど」

危うく忘れかけていたけれど　律先輩の死因は、決して事故や自然死じゃない。

誰か、あるいは彼女自身が、俺の貴重な盟友を、いつも簡単に停止させた。

「……伊賀奇先輩は、いつものとこ?」?

『うん』

「わかった。それじゃ、」

『あ、待つて!』

『?』

珍しく、翡翠が声を荒げた。

『……その前に、みつきちゃんのお見舞い、して』

「…………」

ふむ。

『いいけど。……嫌いじゃなかつたっけ?』

「この双子姉妹、何故かお互に近寄らないようしている節がある。理由は両者の性質上という意味でわからなくもないけど、何か、他にも原因があるような気もする。

『キライだよ。大っキライ』

即答だつた。

彼女らしくなく、最も彼女らしい、純正な悪意がそこにある。

『でも、クーヤにお見舞いしてほしいの。そうしないと……あの子がここにいる意味がないから。だから、お願ひ』

「…………？」

彼女はそれきり、何も言わなかつた。

10・孔谷透

少し迷つた結果、翡翠の忠告通り、保健室に行くこととした。果たして、みつきは額だけを出してやすやと寝息を立てていた。

「…………この分なら、大丈夫そうだな」

ゆづくじと立ち上がり、仕切り代わりのカーテンを閉めて、頭を切り換える。

「あ…………もういいの?」

「うい。図太いヤツで助かります」

やたら長い髪を一つに纏めた、ボーグシューな感じの恐らく同年代の女の子が、声を掛けてきた。

俺が答えると、女の子は何故かパチクリと目を丸くし、しばらくフリーズしていたけど、やがてポン、と大げさに手を叩いて、神妙な顔つきに変わつた。みつきと似て、感情表現が著しい子なのかもしない。

「…………図太くなんかないと思つ

「え？」

女の子は、なんとはなしに真っ直ぐ俺を見据える。僅かに接近する、強い意志を感じさせる琥珀がかった二つの眼球。まるで、心の奥底をのぞき込むようだ。

否。

まるで、自分の奥底をのぞかれることが怖くないようだ。

おいおいおい。

おいおいおいおいおいおい。

この子、本当に人間ですか？

「泣いてたよ」

異星人は、自分が不当な扱いを受けたように、怒っている。

怒っている。

ああ。なんて、人間らしい。

しかし、今気になるのは、それ以上に。

「みつきが？」

あの、みつきが？

たかだか 人間が一人、死んだくらいで？

「……悲しくないの？ キミは」

「なんで？」

思わず、語調が強くなっていた。

そんなの。

いつだつてどこかで起つてゐる、当たり前の日常だらつ。

「……目、閉じて」

「うん？」

言われた通り目を閉じ、一拍の間があつて、

「……歯ア喰いしばれクソ外道がああああああああああッ……！」

轟音。

天井、蛍光灯が目の前に。口ケットのように頭が先端、回つて回

つて口から鼻血。

訳もわからず暗転する意識の底で、ぼんやりと思った。
すいません。ここ、保健室DEATHよね？

「…………はつ！」

目が覚めた。

ということはつまり、先程まで睡眠なし意識を失っていたんだ
らう。

「オ、オハヨウゴザイマス……」

「お……」

見覚えのある長い長い髪の女の子が、ぎこちなく話しかけてきた。
……はて。何か、彼女を見ていると激しく逃げ出したい衝動に駆
られるんだけど。

「で、でもよかつたー……顔に傷とか残らなくて」

「顔に……？」

「どうか、そもそもなんで俺はベッドの上にいるんだ？」

「なあ、聞きたいんだけど……」

「ナ、ナンデスカ？」

「なんで俺の腕、動かないのかな？」

さつきから試しているんだけど、右腕が棒切れのように動きませ
ん。

「え」

女の子は、慌てて俺の右腕をつかむと軽く呟いて「痛つ！ ちよ、
本気痛いから」

おお、我ながら珍しく狼狽している。さすがの俺でも、生命の危
機に瀕しているときぐらいは人間らしくなるものらしい。

「ううう、ごめんなさいっ！」

「謝るくらいなら叩かないでよ……」

「そ、それもそうだけど、えーっと、つまり、……」

顔を俯けて、彼女らしくもなく というほど知り合った仲じゅ
う

ないけど、口^いむる女の子（といふか、まだ名前聞いてなかつたな……）。

「ところで名前何？」

「ふえつ！？」

何か言おうとしていたのか、不意を突かれたらしく女の子は奇妙な声を上げて狼狽してから、火照る顔を冷ますように手をパタパタさせた。

「あ、そつか。そうだよね。改めてこひんにちは、わたし、比奈。

朱野原比奈」

「ふーん。俺、孔谷透」

「うん。葉月先輩から聞いてる」

「……」

多分、みつき 伊賀奇先輩 葉月先生 朱野原のルートを辿ったんだろう。俺はそこまで有名人じやないし。

つて、そうだ。みつきの見舞いも済んだし、気は進まないけど、伊賀奇先輩に会つて、事件に関する情報を集めないと。せつかくの一大事件だしな。

僅かに芽生えた興奮^あが褪せない内に、情報を集めないと。

「介抱ありがとな。俺、もう行くわ」

「え？ ちょ、ちょっとちよつと……」

清潔なベッドのすぐ横に綺麗に並べられていた上履きを履いて、左腕に力を込めて立ち上がる。……よし。片腕だけでも、右腕はスタンガンを浴びているような激痛が走るくらいで、それほど支障はないな。そういえば、大分昔に素手でガラス割つたときの傷は、まだ跡は残っているものの、一応塞がつてゐみたいだった。まあ、そんなもんだよな。

「待つてつてば！ せめて固定しないと悪化しちゃうよー。」

「……別に、」

「いいから座るー。」

こわさか乱暴に両肩を抑えられて、しぶしぶ回転式の椅子に座る。

衝撃が右肩から腕まで伝わってきて、軽くブラックアウト寸前だつた。

「……確かに悪化するな」

「そのままもめてる。」

「もお……他人だけじゃなくて、自分にも興味ないんだね、キミ」
朱野原は、手際よく右腕を吊ってくれる。意味もなく、将来はいお嫁さんになりそうだ、と思った。もつとも、この世界に外の法律や道徳なんてものは干渉し得ないので、将来と言わず今この場で結婚を申し込む手もある。でもまあ、……律先輩と比べると、スタイルがなあ。

「……何？」

怪しい視線に気づいたのか、不思議そうに眉を潜める朱野原。どうしてなかなか、カンも鋭いらしい。

「いやいやいや。むしろ逆」

身の危険を感じて、話を戻すこととした。

「逆？」

感情はないけど、興味はありありますよ。

「例えば、そうだな……朱野原に彼氏がいるかとか、すごい気になる」

「力　　い、いないよ、そんな人……（ボソボソ）伊賀奇先輩には、葉月先輩がいるし……」

「じゃ、付き合わない？」

「付き　　？」

包帯を巻く手を止めて、三秒ほど言葉の意味を頭の中で消化しているように硬直してから頷いて、

「　ごめんなさい。わたし、好きな人がいるから」

朱野原比奈は。

俺の適当極まりない告白に、真剣を以つて答えた。

「バツサリー」

空いた左手で額を押さえ、天井を仰ぐ。

なんてこつた。

マジ、好きになりそつ。

「……はい。できたよ」

「さんきゅー」

処置の終わりを宣言したものの、朱野原は、恥ずかしさが残つて
いるのか、目を合わせてくれない。仕方ないので下から覗き込んで
みたものの、右から見れば左に、左から見れば右に顔を逸らされて
しまい、ひどく楽しかった。

おお。楽しいなんて言葉が、上つ面だけでもこんなに自然に出る
とは。

やつぱり、惜しいなあ……。

「どうしてもダメ？」

「……うん。ダメ」

「上下座しても？」

「うん……」

「結婚からでいいから」

「ハードル上がつてるよ……」

「じゃ、友達から」

「それなら……うん、いいよ

「よろしく、比奈」

「ひひな？」

「友達なんだし、呼び捨てくらいは」

「……そうだね。よろしく、透

「わお」

素敵なかみだりだった。

俺の強引な誘いに一向に気分を害した風もなく。

新しい友達ができたことへの喜びと、少々の照れを絶妙に混じり
合わせて。

俺には一生体現出来そつにない、素敵なかみだりだった。

「保健室、レベル高いよな……」

元祖大和撫子な葉月先生といい、猫タナースな初音ちゃんといい、新発見、人間値測定不能な比奈といい。

みつきのお見舞い、ある意味大正解だつたな。不謹慎だけど。「後で識別称号聞いたとかないと……」

彼女をより深く理解するために、あの囮いたがり羊飼いに。それはさておき、現在地、新聞部室前。

部屋の主は、識別称号《道化》クラウン、あるいは《詭弁王》フェイクオール。

命名部長の語彙力を以つてしても、一語では捉え切れなかつた異色人間。

「すいませーん。伊賀奇先輩、いらっしゃいますー？」

長短強弱を付けた何度かのノック。

意味もなく、モールス信号でSOSを発信。

「へえ、君にしてはなかなかウイットに富んだ挨拶じやあないか。いいよ、入りましたえ」

「……どうも」「やつぱり、衰えることなく、最速思考の持ち主だった。

相変わらず面白い声帯だね、というよくわからない歓迎の言葉を無視して、俺は事件のあらましを伊賀奇先輩に話した。

「で？ 何から聞きたい？」

「じゃ、まずは犯人から」

この人相手に駆け引きは不可能。何を聞きたいか、ではなく、何から聞きたいか、と尋ねる彼は、間違いなく俺の質問を全て先読みしている。あるいはそう思わせることが彼の手なのかもしれないけど、生憎俺はその手の心理戦は面倒だから、開始一秒で白旗を揚げた。

果たして、伊賀奇先輩はあからさまに失望した風に悲しそうな顔になつた。

「おやおや……つれないね。久しぶりに《会話》ができると思つた

のに

そりゃあ、あなたにとっちゃ普段の会話なんて予定調和に過ぎないんでしようけど。

そんな退屈な能力。こつちは、羨ましくともなんともないんですよ。

「……何か言いたそうな顔をしているね」

「別に。ただ、世の中ギブアンドテイクですよね」

「へえ？ ジャあ、僕が情報を提供してあげる代わりに、君は僕に等価分の何かをくれるつていうのかい？」

「『猫屋』のクレープ爆弾を一つ。バルサミコス味で」

「……OK。なんなりと聞いてくれたまえ」

効果は抜群だった。ちなみに『猫屋』は頭に一匹の白猫と黒猫を載せて調理を行うという、衛生上とても問題ありげなクレープ屋だ。付け加えるならば、あの店の商品は主に食用ではなく戦闘（投擲）用に使用されることが普通で、あの斬新かつ新鮮な味に自我を崩壊されずにいられるのは、世界広しと言えど無類の甘味好きなこの人くらい。あるいは調理者本人だけだろう。もつとも、あの味を甘いと評するには相当な覚悟とライフポイントを必要とするだらうけれど。

「しかし、犯人、犯人ねえ……初手としては無粋極まりない質問だと思わないかい？ 初手で地球は丸い説を使って玉で王を取るぐらいい無粋だよ」

「例えがコアつていうかマニアックですね……いいじゃないですか、お互いの合意があれば」

「まあいいんだけどね……ここでアッサリ解答を出してしまふと僕の出番がなくなつてしまふから、茂花君がくれた簡単な情報から説明しよつ」

チツ……長くなりそうだな。

「何か言つたかい？」

「いえ別に？」

「ふうん
ぬうん。

伊賀奇先輩の婉曲かつ抽象的な説明を要約すると、以下の通り。律先輩の死亡推定時刻は、俺とみつきが死体を発見したのと同じ日の午前7時頃。死因はナイフに刺された部位からの出血多量。俺たちが現場を去った後、さすがは元新聞部副部長の葉月先生、唯一の出入り口であるドアを始め、外部とあの部屋とを繋ぐ全ての怪しい箇所をチェックしたそうだが、ドア以外は完全に施錠されていたらしい。俺は、スペアキーを使って鍵を開けて入室した訳だから、つまり

「密室殺人事件、ですか」

「分類するならね」

全く……この「」時世にしては、オーソドックス過ぎる響きだ。

午前七時とは、生徒が学校に入れるようになる時間だ。時間に厳格な律先輩は恐らく一番にあの部室を訪れ

「君の……正確には翡翠君の通報を受けて茂花君が到着したのが八時半。つまり犯人は、君たちが部室を訪れるさらに前に部室に踏み入り、辻富律を殺害した。そういうことだと思うかい?」「ですかね……」

含みのある問いに、適当に相槌を打った。

「というか個人的には、そんなチヤチな密室よりも現場に置いてあつた将棋の方が気になるんだけどね。君、再現できるかい?」「はあ……できますけど

そんなことよりつて、律先輩じゃないんだから……。

俺の複雑な心境をよそに、そりや結構、と伊賀奇先輩は上機嫌そうに机の中から初期配置に並べられたマグネット将棋を取り出し、俺に渡した。

「……用意いいですね」

「何、どちらにせよ一局ご指導願うつもりだつたし、ね」

先輩の方が強いですけどね……。

「えーっと、ここがこうなつて、この角が成つてて……」

記憶を掘り起こし、律先輩最後の対局、その圧勝図を再現する。

「おや、初手からは並べてくれないのかい？」

「最初から見てたわけじゃないんで」

やがて、局面は接戦 どころか一方的な侵略による略奪を繰り返して終盤戦へ。五十瀬先輩の陣は完全に崩壊し、対する律先輩の陣は傷一つ……否、たつた一つの歩に入り込まれているけれど、それ以外は理想形の布陣だ。

「へえ……これはまた、なかなか楽しい展開じゃあないか。次はこっちの、瀬戸君側の番だろ?」

「はい」

さすが 一目でわかるか。

「律先輩が死んだ前の日の時点での彼女と五十瀬先輩との対局は、ここまでです。で、当曰は一手だけ進んでもました」

「ふうん」

造作もなく、白磁のような纖細で長細い指が孤立する手を掴み、パチリ、と一步進んで歩と成った。

その手こそが、この圧倒的な劣勢を覆す、唯一無一の鬼手だつた。

「 正解です。さすがですね」

「そりや、これしかないからね」

攻めつ氣のある指し手なら誰でもわかる、と当然のように伊賀奇先輩。そういうえば……五十瀬先輩だって弱くないのに、こんなにも一方的に負けているのは、あるいは、律先輩との対局を長く楽しみたいという気持ちの表れだつたのかもしれない。

でも彼女はもういない。

彼女は、辻宮律は、一度とこちりに干渉できないどこかへと昇華された。

「また一人、惜しい指し手を失つたね」

彼女の死ではなく、自分の楽しみが減つたことをのみ嘆く伊賀奇先輩。

「そうですね」

適当に相槌を打つて、薄暗い部室の奥を注視する。さつき気が付いたんだけど 先輩の後方に、何かがいるような気配がする、ような……？

「ところで孔谷君、君はこれからどうするつもりなのかな？」

「……答えてくれそうにないので、自力で收拾をつけます。差し当たっては」

「

殺戮鬼VS正義の味方、その顛末を見届けないと。

「助ける気はないんだろう？」

「それが何か？」

鋭い指摘だった。声に出してもいいのに、的確にじひらの思惑を読んでくる。

しかしそれ、その通り。

どちらが勝つかに興味はあるものの……その結果、どちらかがどうにかなってしまうことについて、感想はない。

「いや、別に。ただこのままじゃあ、ちょっと戦力差がありすぎるんじゃないかな、と思つてさ」

それは確かに。

前回の勝負は、先の将棋同様、試合とさえ呼べないお粗末なものだった。

しかも今回の土俵は殺し合い。どれだけ怒りに我を忘れたところで、あの人を嫌いになれない正義の味方に、人は殺せない。

否。既に死んだモノでさえ、殺せやしない。

だからこそ、その突出した優しさが、彼をここに呼んだんだから。

「とは言つても、俺や伊賀奇先輩が手伝つても役に立たないんじゃ

？」

むしろ邪魔？

「いや、君がピンチになつたらみつき いや、今は翡翠君だった

つけ？彼女が助けてくれるからね。それはそれでアリじゃないかい？」

「そんなことしたら、学園崩壊レベルの争いになっちゃいますつて嘘か真か、翡翠の後ろには生徒会執行部の誰かの影がちらほらあるとかないとか。

まあもつとも、もう崩壊してる感は否めないけど。

「そこで、だ。切り札として、彼女を貸してあげよつすい、といつ動作したかわからない洗練された流れで、伊賀奇先輩は席を立つ。

その後ろには。

「…………いやあ」

見覚えのある、装飾に乏しい漆黒の聖服。

じつして今までこんな輝きに気づかなかつたのか 限りなく銀色に近い白髪は、光一筋と差さないこの場所にあってもなお、静謐な光沢を帶びて。

腰を浮かせた正座のよつな姿勢で床に座り込み、恨めしげにこちらを上目遣いに見上げる=白眼は、強い意志を秘めた猫じみた黄金色。

かえら あるか
還界或華。

識別称号《白いあくま》。朽木先輩の後を継いで黙祷部長を担う強者。

そこまでは、俺の情報と一致する。

ただ、特筆すべきは。

ただ、注目すべきは。

「……え、そういう趣味？」

「あつはつは。いや、どちらかと言えば僕の趣味さ」

そのボリュームのある髪の上に、不似合いな「否、異常なほどしつづくる謎アイテムが。

「茶色か黒か迷つたけれど。やつぱり、或華君は白と黒だよね。黒を基調とした、三角のカマボコを一つ付けたカチューシャまあ、俗にいう猫耳が、しっかりと載せられていた。

。

。

いや、アリだけど。

うん。

OK。

「ええと……」

いまいち事態がつかめないので、伊賀奇先輩に視線で助けを求める。

「仔細の説明は面倒だから割愛するけれど、彼女にはいくつか借りがあつてね。そうだな君の中で事件が解決するまで、彼女を好きに使つていいよ。少年誌に掲載できる範囲なり」

「な、ちよ、ちよつと待ちなさいっ！」

反論の声を上げたのは、件の還界（確かに同年代だったんで呼び捨てるにすることにする）。やつてられないことばかりに猫耳に手をかけ、

「三十二対十七」

伊賀奇先輩が、何かの結果を呟いた。

「私を存分に行使しなさい、孔谷。最大限の結果で応えてあげるわ」

見事な豹変だった。

まあ、何はともあれ頼もしい援軍を得た。機械装甲 + ロケットパンチ装備の熊を素手で倒せる彼女なら、あの殺戮鬼相手でも引けを取らないに違いない。

「えーっと、還界？」

「或華さんでいいわ。呼び捨てされるの、嫌いなのよ」

「……或華さん？」

「何？」

妥協していくような軽視されているような、微妙な譲歩だった。面倒なので、内心ではそのまま還界で通すことにする。

「じゃ、行こうか。神斜がどこにいるかわかる？」

「ええ。大方の予想はつくわ」

「そりや結構。それじゃ先輩、不幸があればまた」

「最後に一つ」

とても自然な呼び止めで、危うく部屋を去りかけた。

「何ですか？」

振り返った先、いつの間に用意したのか、最初から置かれていたのか、冷めたココアをひとすりした伊賀奇先輩は、俺のほうを見ようともせずに、

「 月まで行けば、君の身の丈は変わるのかい？」

五十瀬先輩が逆転しかけた局面に、どじめを指す至高の一手を放ち。

なんでもないことのように、誰かに對して呟いた。

即座に翡翠のところへ向かいたいところだったけど、雨が降ってきたので遠足は中止になつた。理由は簡単、雨の日の彼女はひどく機嫌が悪いからだ。しかし恐らく神斜は近いうちに彼女に接触するだろうから、少なくとも明日の午後までは捕まらないよう、そして、少なくとも明日の午後までは、神斜と五十瀬先輩が衝突しないよう情報を操作してくれるよう翡翠に頼んで、みつきを連れて学校を後にした。

理由は簡単。

俺が、そんな面白そうな事態の顛末を、見届けられないから。

天をうつすらと覆う切れ目のない雲から、断続的にじぼれ落ちる透明色。

ぱたぱたと乾いた地面を潤す音の連なりに、しかし俺はなんの感概も湧かず、みつきにとつてはこれは音楽だ。

「いい天気だね」

雨だけど、とみつきは笑む。彼女にとつて悪い天気とは雷鳴の聞こえる天気のことで、俺にとつていい天気とは心が動かされそうになるほど極端な天気を指す。

「そうだね」

ズレしているといえば、普遍の塊であるみつきでさえも、だからこそ、ズレているのだろう。

あれだけ泣いていたみつきは、今はもうすっかり立ち直っているように見える。でも恐らく、まだ律先輩の死を引きずっているだろう。一般人が肉親を失つたくらいには、喪失感に囚われているに違いない。他人を心から家族同然に思えるその姿もまた、最も人間なみつきらしいものだつた。

ともあれ。

一つの傘に寄り添う俺たちは、一人で一人。これまでは、俺が一方的に付きまとつてているだけで、みつきは一人でも生きていける。そう思つていたけど。今日のことから、主に比奈の発言から

考えるに、案外、彼女はもろい存在なのだ、と知つた。

車の通ることの方が珍しい横断歩道で、俺たちは意味もなく信号待ちする。みつきは目を瞑り、俺にとつては雑音でしかない雨音に耳を澄ましている。寒さにかじかんだ唇が奏でるリズムは、滑らかに空に舞い上がり、誰かの耳元に届くだろう。

注意して聴いていなければ搔き消されてしまうほどのか細い旋律に耳を傾けながら、濡れて光沢を帯びたアスファルトに生まれた水たまりを見つめる。

想起するのは、律先輩だつたモノが作つた生の沼、あるいは死の池。

その中に沈んでも尚、終点に埋没しても尚、彼女に一点の穢れもなく。

だとしても、彼女さえ完璧な人間にはほど遠い。

高潔ではあつたけど。

「……俺が言える立場じゃないけどさ」

人間の域にさえ達していない俺には。

あるいは、人間という枠組みから逸脱してしまつた俺には。

と。

「あ……猫」

信号はまだ赤だつたけれど、みつきは不意に走り出す。彼女が向かつた先に目を凝らすと、狭い路地の間に一匹の猫が倒れていた。降り注ぐ雨は、当然のように彼女を避ける。

みつきは、泥にまみれて動かない迷い猫を、ためらいもなく胸に抱いた。

「……」

外から迷い込んだ、というのはありえない。恐らく、『猫屋』

飲食物を取り扱う店でありながら猫のたまり場と化している、衛生環境が気になるクレープ屋 の一匹だろう。あの店が儲かつてゐるかは微妙だし、食べ残しの『ゴミ』を漁ろうにも絶対的に人口が少ないこの世界では難しかつたんだろう。

路地裏でひつそりと生涯を終えた薄汚い猫。否、だつたモノ。

それは、一度世界から拒絶された俺たちの未来に似て。

だからこそ俺は、みつきと同じようにその猫を見て、やはり何一つ、感じなかつた。

「……ごめんね」

誰に向けた謝罪か、みつきはそう呟くと、猫の死骸を雨の当たらぬい場所にそつと横たえ、最後に頭を撫でた。

その背中には、潰えた生に対する未練も憐憫も羨望もなく。

ただ、全てを許容するような、包み込むような、慈愛と呼ぶには人間すぎる優しさがあつた。

願わくば 僕が最後に見る光景に、このみつきの赦しがあれば

いい。

柄にもなくそんな感傷に浸るような気分を偽装し、晴れることのない空と向き合い、苦笑を作った。

第四章 \pm 幕間 \pm
(Curtain Call.)

11 神斜大地

昔、オレは間違いを犯した。

大切なものを、世界の他の何よりも大事にしていた宝物箱を、大事にするあまり、抱き締めた腕で押し潰した。

“……ねえ、大地？ それでも、わたし”

そのとき、思つたんだ。

オレは 壊し方を間違えた、と。

「……ケツ」

今日もよく殺した。ただ、最近はスキルアップし過ぎたせいか痛みを感じる前に絶命つちまう輩が多いので、出血多量やショックで死なない優しい肉の千切り方を目下研究中。

「チイ……あんのアマ、卑怯なマネしやがつて……」

それはさておき。現在地は時計塔の根元、鈍色の長い長い螺旋階段、その始点。てっ�んに住んでる奴が開けつ放しにしたせいで吹き込んできた風やら雨の被害を被つたせいだろう、一步足を踏み出すと、ギシ、と耳障りな音を立てた。

「ナルホド……侵入者対策も兼ねてるつてワケか」

いくらアイツが他に類を見ないレベルで地獄耳でも、完全無欠というワケにはいかない。彼女自身が寝ていたり他の作業に没頭して

いる間だけは、束の間とはいえ学園のプライバシーは守られている。

「盗み聞きとか、趣味悪いにも程があるつづーの……」

まあ、人のコトは言えないだろ、とか突っ込まれそうだが。人殺しだし。

で、そろそろ本題。

先日はよくもオレの邪魔をしてくれやがったクソ女をとつちめてやろうと思つてやつてきたんだが、そこは三日三晩杯を酌み交わした仲、相手もお見通しのようで、守備兵を用意していた。お陰で、気乗りのしない殺しを大量にさせられる羽目になつて、『一日と半分待つてくれたら入つてきていいよ』とか言われて、そうするとオレとしても無闇な殺生は手が疲れる訳で、正直な所焦らしに焦らされたオレの憤りはメーターを振り切つてリミットブレイク寸前だつた。んでもつて次の日の午後、宣言通り時計塔付近に人影はなく、死体の山は清掃部が処理したらしく綺麗なもので、あの部、部費がやたら高いのはきっと心のアフターケア費なんだろうな、と思った。ドンマイ、恨むならオレと同時期に生まれたことを恨めこれひたすら上のだけ、だと思つていたんだが。

「最後の最後だけ女を用意するたあ、アイツが考えそくなギャグだな。いい趣味してるぜ、つたくよ」

規則的に鳴り響くやかましい轟音と共に、遙か頭上から、ボロくなつた階段を片つ端から踏み抜いて疾駆する一つの影。一足ごとに建物全体を揺らすような重量感は、どうあがいても人外の領域だつた。

「ま、実際人じやえねえしな」

こちらとしても、エリスやら比奈やら、直接戦闘型の女子が相手でないだけありがたいし、文句は保留してやろう。要は殴る相手が女でないのなら、弱者だろうが強者だろうが、男だろうが獣だろうが関係ない。

本番前の時間潰しなど 誰で代用しようど、大差ない。

「さて。挨拶は必要なさそうだな」

駆け下りてくる標的は、勢いを緩めることなく咆哮した。このま

ま体当たりをかまそうというハララしい。遠目にもわかる鋭利な爪が、意味もなく壁を抉り取る。戦闘意欲は充分、つづることか。

その正体は、体長二メートルは優に超える巨大な熊。某ボクシング漫画に熊は下りが遅いと書いてあつたクセに、あの速度。もしかすると、上りはもつと速いのかもしれない。

そこまで直径のない円をぐるぐると描き続ける大熊、それだけならただの異常な光景だが、更に目を引くのは、それに平然と騎手よろしく跨る女子の存在だった。

瞳を前髪で隠した、短めの金髪のツインテール。オレの眼力を使うまでもなく、つるつぺたんであることがわかる各部。彼女の年にしては小さな体躯。乗っている獲物がビッグサイズなせいで、彼女の小ささが殊更際立つ。オレの眼力を使つまでもなく、つるぺつたんであることがわかる各部。

所属は共生部長、名は森守深澄。もりもりみずみ 識別称号は確か、《人間嫌い（アンチ・ヒューマン）》。

……ん？ 何か、まとめた情報に重複があつたような。まあいいか。

「よーお。そいつ何号？」

騒音に負けないよう、大声で聞いた。相手は声では返さず、熊の背中に当てていた手を片方離し、指を四本立てた。オレクラスの動体視力がないと判別できない、受け手を選ぶ対応だった。

「あー そういうや、三号改は或華が倒したんだっけか。そりゃあ……負けられねえな。

しかし今回は、大きさ以外は見た感じ普通の熊なんだが、どんな仕掛けを施しやがったんだか。

「ま、いいや。行くぜ、熊」

もはや何段飛ばしかわからない勢いで迫りつつある大熊に対し、距離を取るのではなく、逆に縮めていく。

「……！」

馬上、ではなく熊上の深澄が、小さく驚く雰囲気があつた。構わず速度を上げ、一撃に込める力を溜めていく。

常識的に考えれば、オレの敗北は明らかだろ。上と下という位置的不利、人間と熊という体格的不利、始動した時間差による速度的不利。ナルホド、翡翠がお膳立てしたに相応しい、よくできた作戦だ。真っ向から挑まれば迎え撃たずにはいられない、オレの性質を熟知している。

だが、翡翠。

「お前の唯一のミスは、本体を、女自身にしなかつたことだ」
刹那、熊が視界に姿を現す。こんな直径の短い螺旋階段での遭遇だ、会つた、と思った瞬間にはもう衝突している。

故に、勝負は、一瞬で決着した。

オレの喉笛を噛み碎かんと開かれる凶悪なアギト、心臓を切り裂かんと振られる一撃が致命傷の右手、どちらをかわせなくともアウト、だがそもそもこの状況で回避する術など皆無。

だからオレは更に踏み込み、躊躇なく、敵の大口に腕を突っ込んだ。

肉の抉れる小気味よい音、右腕の筋肉という筋肉、神経という神経がズタズタに破壊される嫌な感覚。

だがその代償として、大熊の後頭部から、使い物にならなくなつた手首から上が生え出していた。

一呼吸遅れて、放射線状に散布される一匹の獣の血潮を混ぜ合わせた赤い雨。やがて、数秒の痙攣を経て、大熊の鼓動は停止した。

ついで、口ケットのように飛び出しそうになつた深澄の制服のリボンを空いた左手で掴み、捕獲する。

「……こんなもんか。つたく、死んでも離さないつたあ、いい根性してるぜ、コイツ」

右手に食い込んだ牙は、どうあがいても抜けそうになかった。仕方がないので、絶命した大熊の首をへし折り、てこの原理でねじ切つた。うむ、我ながら無粋極まりない。

「修行足んねえな……」

「こんなんじや、本番で絶対失敗する。

アイツと殺^ヤるときは、アイツを殺^ヤるときは、もっと上手く仕留めなけりや、台無しだ。

なるべき綺麗な力タチのまま 一番美しい部分だけを、永遠に奪い取る。

「そういうや、怪我ないか?」

オレの腕に抱かれた深澄は、制服の所々が破れている以外は今回の戦いのせいだけじゃなく、日^じじろから苦労してるんだろう問題なさそうだったが、一応聞く。

「……ん、大丈夫。ゴムが外れたくらい」

ぱつり、と呟くようなか細い返答。これが彼女独特の喋り方だが、大事な実験動物……もとい『お友達』を殺された割に、ショックは少ない様子だった。

「つて、マジか! 待つてろ、今すぐ直してやる!」

見れば、彼女のアイディエンティティであるツインテールの片翼がばらけていた。これはこれでいいという輩もいるだろうが、オレから言わせれば素人以外の何者でもない発言だ。わかつとらん。

ポケットから取り出した大小意匠材質彩色多種多様の髪をまとめるゴム（常備）の中から、彼女に似合つものを素早く選定し、無事な左手と口を使つてさくつと結んでやる。

「……あ、ありがと」

「気にすんな。男として当然のことだ」

存在意義を取り戻した深澄の頭をくしゃくしゃになでてから、天を仰ぐ。残りは、段数にして後五十ちょいといったところ。それくらいなら、腕の痛みも気にならないだろ^ウ。

少し名残惜しかつたが、リボンを引っ張つて捕獲したときのせいで、胸^元が開き気味になつてているグツジョブな眺めを隠そつてしまい深澄を置いて（恥ずかしくないのか、と聞いたなら、「あなたは、虫^{ケラ}の視線に、恥らうの?」とか言われそうだ）、上へと歩を進

める。

そこで 違和感を、感じた。

発信源は遙か下方。螺旋階段を降り切つて、さらに一階ほど下だろうか。さすがのオレでも、人間の気配を読み取れる距離はあの地獄耳女には敵わないが、特定の人物に関しては話は別だ。

還界或華。

オレが恋焦がれる横惑おつわくの少女であり、
オレが一般的に見れば破綻したモノになつた、その始点であり、
オレが最初に瓦解させるべき唯一の存在。

彼女の最大の特性はひとえに、極端に孤独を忌避する習性であり、
その手段として実体としての自分ではなく、記録としての自分を外
界に広めることを選んでいる点にある。それは実感の持てない充足
であり、実際に交わつた結果として残る副産物みたいなものだと才
しなんかは思うんだが、彼女にとつてはどうやら質より量の方が大
事らしかつた。あるいは、彼女と正面から相対できる人間の少なさ
が、彼女をそうさせたのかもしれない。

しかし、まさかお前。

「ここに来るつもりじゃ、ねえよな？」

「……でも、本当に拍子抜け。こんなに弱いなんて」

自戒するように呟く深澄。予想以上にオレが強かつたとは言つて
くれない。まあ、人間なんて醜悪な生物。これはあくまで深澄の
考えであるが、彼女の言に迎合するなら、オレにとつて人間とは男
のみを指す言語となる。を褒めるのは抵抗があるんだろうな。う
い奴め。

そんなことを考えながら、下の気配が気掛かりではあつたが、女
を無視するのはオレの存在意義に関わるので、声だけで適当に（ア
バウトではなくベター）相槌を打つ。

「まあな。正直、もちつと歯ごたえがあると」ざくり。

「こんな簡単に引っかかるなんて、思つてなかつた」

今更ながら、振り向けば。

首から上を喪失した大熊が、俺の背中を切り裂いていた。

12・伊賀奇創兵

いつか無に帰る全てのものに意味がないとすれば、この世における全ての事象には意味がなく、喜怒哀楽にも栄枯盛衰にも森羅万象にも有象無象にも魑魅魍魎にも意味がない。

ただ、ここで肝心なのは、

意味がないとする判断そのものにも、また等しく意味がないという事実。

「なんてね」

どうでもよい言葉遊びだつた。仮にこの世が既に手詰まりだとしても、あらゆる行動の価値が同じならば、自分の気が向くままに好きにやればいいだけの話であつて、なんら問題なかつた。

しかして、こんな一度結論を出した無駄な思考で時間を潰すような真似をしているのは、どうにも僕は、そろそろ訪れるであろう人物の登場を、思つたよりも心待ちにしているようだつた。そして、見計らつたように、

「……創兵さん。いらっしゃいますか？」

部室の外から、控えめに呼び掛ける声がした。軽く応じると、ややあつてゆつくりとドアが開かれた。

「やあ、茂花君。三日と十一時間と四十五分と十秒ぶりだね」

「そんなに細かくは覚えてませんけど……はい、久しぶりですね、創兵さん」

ふわり、と大輪の花が一つ咲くように、穏やかに笑う茂花君。しかし、今回の笑顔は今一つ精彩を欠いていた。

「ふむ。どうも、お疲れみたいだね」

その辺の椅子を引っ張り出して、僕に向かい合つ形で置いて座ら

せる。ちなみに服装は、いつものように白衣ではなく、夏の太陽によく映えるであろう白いワンピースだったけれど、こんな薄汚いところではむしろ不自然なものでした。

「あ、ありがとうございます」

「それで？ 律君の事件について、何か進展はあったのかい？」

積もる話はあるのだけれど、茂花君の体調を慮つてすぐに本題を切り出した。途端、少し疲れ気味だった彼女の瞳が、たちまち霸気を取り戻す。この、仕事モードに入ったときの彼女の強い意志を感じさせる丸く大きな瞳が、僕のお気に入りの一つだった。

「はい。茅さんと光さんに協力してもらつて調べたんですけど、やつぱりあの現場はいわゆる密室状態でした。鍵に糸を引っ掛けたり氷を使ってみたり、ありそうなトリックの痕跡も注意して調べたんですけど、特には見つかりませんでした」

「はつはつは。そりゃいいね」

自分たちに観測できないから存在しないだろう、だなんて。的外れな努力もいいところだ。現実問題、こんなに限定された世界の中でも僕の両手じゃ抱え切れなくらい世界は広く、たとえば説明されても理解すらできない事象なんて、数え切れなくらいあるに違いないのに。

つまるところ。

考えるべきは、トリックではなく、その動機。

「その和室、だつたつけ？ 鍵は誰が管理してたんだい？」

「一つあつたんですけど、一つは辻廊さん、もう一つは孔谷さんとみつきさんと五十瀬さんが交代で使っていたそうです。あの日は、孔谷さんが」

「ふうん。律君の死体は、鍵を持っていたってことかい？」

「……はい。手の中に握りこんでたみたいですね。少なくとも、死後硬直する前に」

「あ、そうそう。それなんだけれど、死体は正座していたって聞いたけれど、それは死後にそういう姿勢にさせられたってことかい？」

「えーっと、私も最初はそう思つたんですけど、違うみたいですね。特に血痕が飛び散つた様子もないですし……不思議なんんですけど、ナイフをお腹に刺されたあと、辻富さんは、その姿勢を保つたまま、出血多量でお亡くなりになられたみたいなんです……」

「そりゃあ、また」

なんていうか……そう、健気な話だね。

普通なら、もがくなり腹を押さえるなりナイフを抜くとするなり、事態を改善しようと試みるとこころだらうに。

そんなにも 五十瀬君のことが、好きだったのかい？

自分の静止よりも、優先順位が上だつたのかい？

「……創兵さん？ 何かわかつたんですか？」

首を傾げてこちらを見上げてくる茂花君。さすがに十年来の付き合いだつた。

「いや そうだね。茂花君は、誰かを自分のものにするつていうのははどういうことだと思つ？」

「え？ え あ、あ、あの、それってどうこいつ……？」

何を勘違いしたのか、顔を真つ赤にして俯く茂花君。こいつになつても、この辺の愛らしさは健在だつた。

「どうつて、言葉通りの意味だけれど」

「じ、事件に関係あることなんですか……？」

「あながち、関係がなくなくなくなくもない」

「え、えーっと……？」

しばらく指を折つて表か裏か考えていた茂花君は、しかしやがて面倒になつたのかため息をつくと、心を落ち着けるように深呼吸してから、ゆっくりと答えた。

「うーん……その人が、一日中私のことしか考えられないくらい私のことを好きにならせる、とかですか？」

「ふむ」

茂花君らしい答えた。

僕なんかだと あらゆる一挙一動を僕の許可なしには行えない

ようにしてること、とか答えるところなんだけれど。

「じゃあ、その方法として対象の殺害は含まれると思うつかい？」
愛するが故に、占領するために、その人間を殺す。

「……ないです。絶対」

考えるまでもない、とばかりの即答だつた。

全く、どこまで素敵なんだい、君は？

「ま、そういうことさ。件の殺戮鬼だつて、決して僕たちには理解できない思考ルーチンで動いてる訳じゃがない。彼には彼なりの理由があつてやつてることだからね」

どこまで逸脱したところで、人間は所詮、ヒトという種の枠組みからは抜け出せない。

でも、だからこそ。

その壁すらも突き破る存在の出現を、切望して止まないのが、人間の性。

「えつと、つまり、……神斜さんは辻富さんを殺してない、ってことなんですか？」

「おや、君も殺戮鬼君の正体を知つてたのかい？」

「朽木先輩に聞きました」

「ああ、成る程。……ま、そういうことさ。第一に彼が最初に殺すべき女性は或華君をおいて他にないし、第一に彼が殺したのなら密室トリックだなんて小賢しい真似はしないだろうさ。そもそも翡翠君の存在を知つている者なら、密室にする意味のなさを、充分に理解している筈だからね」

地獄耳というには地獄耳過ぎる地獄耳を持つ極悪人。

正義の価値を知りながら、さながら深海魚が浅瀬に憧れるようこそ、その場所に辿り着けない憧れに灼かれる少女。

「いやはや どうにも世の中、世知辛いね。

「あ、そつか、そうですよね。……じゃあ、翡翠さんのことを知らない誰かが犯人なんですか？」

「それも違う。それなら、翡翠君が孔谷君に犯人を告げることで、

とっくに事件は解決してる筈じゃあないか」

「え……あれ……？」

そう。

となると答えは一つしか いや。

「一つとも三つとも言えるといふが……なんていうか、難儀だよね」

「？」

ともあれ、この舞台の主役は僕たちじゃ ない。犯人逮捕だなんて疲れることはせずに、のんびりと事の顛末を見届けることにしようかな。

第四章±幕間±（後書き）

えーと、今更ですが、この作品に出てくる大地や或華その他のキャラは、僕の他の作品にいる彼らとは別物（別世界の住人？）です。バックボーンは大体同じですけど。

第五章+回顧、連結、果てに自己完結+

第五章 +回顧、連結、果てに自己完結+
(Dear broken world .)

13・孔谷透

休日一一日の午後、予定通りの時間、みつきと共に還界と合流し、行動を開始する。目的地は勿論、神斜が狙っているだらう翡翠、翡翠や伊賀奇先輩の言によれば殺される心配はないんだろうけど、半殺しならアリ、だとか屁理屈を使われる可能性も否めないし、他にアテもない以上警戒するに越したことはない の住む時計塔。異変に気づいたのは、後は階数にして二つの階段を上れば、時計塔に辿り着く地点のことだった。

「……変だな」

一田立ち止まって、耳を凝らす。

「どうかしたの？」

「いや……さつきから呼び掛けてるんだけど、返答がないんだ」

先程から 翡翠に連絡が取れない。無論、どれだけ逸脱した基本性能を誇っているとしても彼女とて人の子、眠つたり他の何かに熱中しているときは通話できないこともある。しかし、こんな太陽がほぼ真上にある時に眠る趣味はない筈だし、何か手が離せない事態にでも遭遇してるんだろうか。

「翡翠の？」

「ああ」

さすがに裏事情に深く通じている黙祷部、翡翠のことも知つていた。

還界或華、識別称号《白いあくま》。秩序立つた闇を正式な手順に則つて圧縮したような漆黒の黙祷部専用制服、すなわち勝負服（

（一部の男子の間でのみ通称となっている）に加え、現在猫耳装備中。しかし、どうせなら尻尾も付ければよかつたのに。伊賀奇先輩、意外と詰めが甘い。

「しかし、似合ってるね」

せっかくなので、褒めてみた。

「わ、私だって好きで付けてるんじゃないわよつ！……あの青ダヌキ、なんで角二つハンデのオセロであんなに勝てるのよ……！」

記憶によると、確かに一般人相手なら角四つのハンデでもいける、と言っていた気がする。さすがの最速思考でも、《白いあくま》相手には慎重になつた、ということか。

「というか、五十戦もやつたのか。負けが確定した後も。さすが、負けず嫌い。そしてサド。」

「別に、今なら外してもバレないんじゃ？」

「無理ね。翡翠の耳があるもの」

あ、そうか。どうも日常的に彼女と通話していると、その存在の特異性を失念してしまいがちになる。

遠辺翡翠。識別称号《先天的悪性子女》。

決して人前に姿を現さず、しかし学校内のあるゆる誰かを、その本人自身よりも深く理解している観測者。発汗や呼吸・脈拍、果ては心音から内臓の健康状態まで、知ろうと思えば彼女に探れない情報はない。だが真に厄介なのは彼女の根っからのお人よしであり最上質であり、同時に自らを正義という立場に置くことができないことで。

「一言で言えば。

彼女は、他人をまるで自分自身のように捉えることで、対象者の全てを共感する。

故に、彼女と対話することは、深淵に立つて自問自答する作業に酷似する。

「……本当、嫌な女だよな」

ホント、あのおせつかい焼きは。

自分の手を煩わせずに、無邪気に無意識に人を傷つける。

「……何？ それ、もしかして私に対する不満？」

独り言を聞かれた。

「まさか。こんないじり甲斐あ……もとい心強い援軍がいてくれて、助かるよ」

俺は武闘派じゃないから、物理的な防御には自信がない。この先、神斜大地 『未完の終焉（unbroken）』 や、それに準じる危険人物と遭遇した場合、彼女がいるかいなかで大分行動と結果が違つてくる。

「助かる、ね。……どうでもいいけど、そんな死んだ魚みたいな目で言つても説得力感じないわよ」

「悪かったね」

よく言われるけどさ。

人の容姿に文句を付けられても困る。訂正。困らないけどつまらない。

「それに、私が貴方を手伝うのは、親切心なんかじゃないわ。あの男に借りを作らないためと、……身内の不始末を処理するため。それだけよ」

身内 そう言つたときの彼女の表情は、自分の中に渦巻く感情をどのベクトルに向けるべきか迷つていて複雑そうだった。その、感情の処理に不慣れな様子は、どことなく律先輩と重なるものがある。

もつとも、もう過去の人だけどさ。

「それは別にいいんだけど」

彼女の腹心に興味はない。むしろ理想としては、神斜と一戦交えてくれる展開を密かに希望してたりする。

この二人が出会つたとき、何が起こるのか。それはきっと、俺が感情らしきものを取り戻すのに、大いに参考になる。明確な根拠を提示することはできないけれど、この仮説には、俺にしては搖るぎ

のない確固たる確信がある。

と。

「行」、くーや。お姉ちゃんが待ってるよ」

今日に限って口数の少ないみつきが、穏やかな重圧で先を促した。

「……そ、だな」

今日のみつきは、朝からじとなく雰囲気が違う。まるで何かを覚悟しているように、決意しているように、いつも笑顔を保ちながらも、張り詰めた空気を纏っている。

なんだろう。久しぶりに姉に会うから、緊張してるんだろうか。遠辺みつきが、遠辺翡翠に会いに行く。

それは正直なところ、俺にとって、あまり心穏やかでない事態だつた。

……心穏やかでない？ なんだつて？

一体俺は 何に、恐怖を感じているっていうんだ？

昨日、とある事情で演劇部を訪れた後、学校からの帰路。事情を説明した俺に対して、みつきは予想外にも「わたしも行く」と言い出した。

「……いいのか？」

なんで、今になつて急に？

「うん。お姉ちゃんとは、いつかこうしなきやいけなかつたから」

穏やかながら、決意のこもった声色。

その瞳は、淀み一つない光に満ちて。

その強い覚悟を。始まることのない俺が、止められるわけもなく。

「……わかった」

俺は、ゆっくりと頷いた。

「……じつじつしたの？ 行くな、先を急ぎましょ」

「ん……ああ」

踊り場で止まっていた俺たちとは、再び田舎の地へと歩き出す。し

かし、一歩足を踏み出した途端、今度は還界が、動きを封じられた
ように停止した。

「どうした?」

「 大地? 「

かすかな咳きは、俺に向けられたものではなかつた。
怒りと驚きと喜び、その全てを混然とさせた纖細にして絶妙な声
色で。

まるで雷に打たれたように、三白眼を見開いて。
まるで見えない巨大なハンマーで殴られたように 還界は、飛
び出していた。

「 お 」

声を掛けよう、と思つた瞬間、彼女は風圧と共に姿を消していた。
……やっぱり、本職は格が違つゝか。
「 ……となると、見逃せないな
「 行こ」、ぐーや」

「 ああ」

彼女の通過したであらう道を、腰に掛かる僅かな重みの意味を感じながら、野次馬根性全開で全速力で追いかける。

殺戮鬼と悪魔の邂逅。

およそ常人とは懸け離れた二人の関係は到底度し難く、しかしあるいは彼ら自身にも説明できない何かがあつて。

その顛末は あらゆる意味で予想通り、俺がヒトになるための
重要な一ピースとなつた。

その途上。

屋上への入り口に置かれた、五十瀬正義の死体を、通り過ぎた。

実を言えば 大熊が生命体じやないつてことぐらには、フニミ

ニストに定評のあるオレと言えど、貫いたときの手応えから理解していた。やはり、生きているモノとそうでないモノでは破壊したときの充実感が違う。

で、どう改良してみたところで所詮は命令で動く機械。スピードもパワーも警戒するほどではない。後ろから強襲されようが余裕で避けられるレベルの脅威だ……と思つてたんだが。

「……つたく。最高のタイミングだぜ、或華」

さすがのオレも 最愛の女、還界或華の登場とあつては、心穏やかではいられなかつた。むしろ、その一瞬の隙を見逃さなかつた深澄をこそ褒めるべきだろ？

「グッジョブ」

褒めてやつた。

「…………」

無言で親指を立ててきた。誇らしげだ。

さて。

現在オレは、階段の縁に咄嗟に伸ばした左手の指先の力だけでどうにか落下を免れている。本来のオレなら一秒と掛からず復帰できるシチュエーションなんだが、利き腕はイカれてる上に、背中の傷は思つたより深い。とめどなく血が流れしていくおかげで、次第に思考がぼやけてきやがる。

「……ありがと、ね」

不意に。

金髪ツインテール無口美幼女が、そんなことを呟いた。

「……何が？」

「わたしが今、生きてること」

奇妙なタイミングで、お礼を言われた。

確かに、あのまま投げ出されていれば、大怪我は免れなかつただろ？が。別にお前のためなんかじゃなく、下手に回避とかして熊が制御不能になつて、万が一にでも死なれると困るんで、右腕を犠牲にしてまで確実に保護しただけなんだが。まあそもそも、勝敗なん

て初めからわかりきつていたことだし。この程度の小物に遅れをとるオレじゃない。

つて、今絶体絶命なんだけどな。

「いやあ。男として当然のことをしたまでサクールな雰囲気を全身に漂わせてみる。背中を切り裂かれた折につい反射神経全開で振り向いちまつたせいで、額からも流血してた。垂れ落ちる血が臉を覆う。チ……そろそろ、指が痺れてきやがつた。

「なんで、わたしを助けたの？　わたし、あなたのこと好きに、ならないよ？」

変なの、と付け加えて、深澄は首を傾げる。まるで、結果の伴わない行動など無意味だ、とでも言つよつに。

そのどこか機械的な仕草に、こんなときだつてのに思いを馳せた。識別称号、『人間嫌い（アンチ・ヒューマン）』。

たかだか知能が、生存能力が高いというだけで地球を我が物顔で占有する人間という種を憎む、人間の少女、か。

ハ。これ以上ないつてくらいに、矛盾してやがる。

それが人間だつてコトに、お前は気づいてんのか？

「……さあて、な。オレはいいものは愛でるし、そうでないものは無視するか視界から消す。お前はいいものだ」

そんでもつてかわいいは正義だ、と結ぶ。果たして、深澄は表情を隠す前髪をちょいちょいといじり、

「ありがと。さよなら」

感謝の言葉もそこに、容赦なくオレの指を蹴り飛ばした。

ハ。上等だ。

さすがに、誤魔化し切れるもんじゃあなかつたらしい。

落下、落下、落下。瞬間に体重を失い、風を切る感触が、待つたなしで身体を蝕んでいく。さすがにここで気を失うと一巻の終わりなんで、左腕の肉を噛んで意識を繋ぎ止める。

「死んじまつてる右腕をクツションにすれば、なんとか……」

なるわきやねえが、オレならどうにかなる。多分。

頭から落ちるよう体勢を入れ替え、落下地点を確認。屋上の床は後もう少しのところまで迫つ

「 馬鹿野郎！ 何してんだつ……！」

或華が。

全てを許容するような包み込むような笑顔で、大怪我は免れないであろうオレを受け止めるように両手を広げて、待っていた。

マズ、い。マズいマズいマズいマズいマズい……！

このままじゃオレは、間違なく或華を、口、口／こんな望まない形で。／だが、チ、チの巡らない脳はうるんな思考しか許さず、衝動のみを捉えて意思と成す／逃げろ、逃げ逃げ二げろ、お前はこんなところで　されるような価値じやないつ……！

「 或華アアアアア　つー！」

最大限の殺氣を滾らせ、そこを退け、と警告する。

だが、還界或華は。

オレが認める最強の女は、一步足りとも引くことがなく。

「 馬鹿ね。これで、貴方は」 ずふ、り。

私を一度と忘れないわ、と。

勝ち誇ったように。自らの心臓を抉り取つた相手に向かつて。恋人に睦言を囁くように、呟いて。

魂を譲り渡すような接吻を交わし。

絶頂に達したように、緩やかに倒壊した。

人は、一人で生まれて一人で死ぬ。

いくらお互いの情報を交換しあつたところで、いくら肌を重ね合わせたところで、いくら時間を共有したところで、突き詰めれば他

人は他人。限りなく近づくことはできても、決して交われない漸近線。

そんな当たり前のこと。私は、どうしても耐えられなかつた。

「大地」

見上げた遙か先、螺旋階段の終点付近。

私と同じ喪服じみた漆黒の衣装に身を包む少年 神斜大地との再会。彼は、階段の縁に辛うじてかけられた左手だけで、自分の全体重を支えていた。

正直な話 彼が瀕死の状態であつたことに、それほど驚きはなかつた。

だつて、自業自得だもの。

あんな不安定な歩き方をしていれば、どこかで転ぶのは当たり前。自分の欲望を押し付けているだけでは、自分が望むものだけを一方的に略奪していくだけでは、やつていけない。

そう教えてくれたのは、大地。他ならぬ、貴方だったのに。

大地の体が、ずるりと下にズレる。利き腕が潰れた今の彼に、文字通りもう手は残されていなかつた。

「……ざまあないわね」

無様というなら、人間としての誇りさえ失つて獸と化した今の彼ほど、無様な存在はいない。ライオンや鷲が人間に駆逐されたように、突き詰めていけば強靭な単体は脆弱な群体に敵わない。

でも、大地？

貴方はもう、人の輪には交じれないでしよう？

それでも貴方は、全てを壊そつと、世界で一番美しいものを貶めようとするんでしょう？

なら 特別に、手伝つてあげるわ。

一人きりなのは、私も同じだから。

「 馬鹿野郎！ 何してんだつ！！」

大地の咆哮が上がる。上と下で目が合つ。空氣にさえも敵愾心を

燃やしているような鋭利な双眸に、ほんの少し逡巡と焦燥が混じる。

あらあら、そんな表現がへな顔しかねないで

確かにさうでもないけど、そもそも、貴方が男を殺すようになつた理由からして、殺戮鬼になつた理由からして、臆病者の発想よね。私といふと我慢できそうになかつたから、私から逃げるために、世間から隠れる大義名分を作つた。

そんな感じでしょ？

でも、いいわ。許してあげる。

そんな貴方の弱さが、今このとき、私にとって最大のチャンスを生んでくれたんだもの。

主の意図に反して謙譲

そう。それでいいの。

そうやって私と（）、交わり（侵し）なれ。

猛獸が雄叫びを上げる。

その慟哭は、どこか孤独を嘆いての啼泣ていきかうに聞こえた。

利害の一一致、利用され利用しあつた関係、喰う者と喰われる者。私たちの関係は、せいぜいそんな風に形容されるかもしれない。でも そんなことは、それこそ関係がない。

「馬鹿ね。これで、貴方は一すぱり。

私の心臓に、断罪の杭（神斜大地）が突き刺さる。私と彼が一つになる。

になる。

一人では生きられない私と、これから先も自身が自身であるために、同位の誰かが必要だった貴方は、きっと、出会うべくして出会つた。

これで貴方は強くなり、これで私は満たされる。それで貴方は 私を一度と、忘れられないわ。

最後に少し、彼の呼吸を、生の息吹を奪い取つて。代わりに私の呼吸を渡す。

疑うことのない、至福のまどろみに包まれて。

私の時間は、永遠に停止した。

いやー……諸事情により投稿（というか元々自体）と大分疎遠になつてしましました。話の続きを待つて下さっていた方（いるといいんですけど……）、大変申し訳ありませんでした&お待たせしました、第五章です。ついでにこれまでの章も手直ししました。途中で（・・）が入るのはその部分を強調するルビ振りなんですが、携帯の方ではルビが（）で表示されるので、どうしても読みにくくなってしまうようです。「」勘弁下さい。で、次にいつ機会があるのかわからないので、最終話まで一気に行きます。ようしければ、どうか後しばしのお付き合いをば。

第六章 千原初へ到る鍵、或いは (Good night)

15 · 孔谷透

それは、凄絶というには神聖過ぎる終焉だった。

擁した限りなく銀髪に近い白髪を持つ少女。

を失つた証のように肅々（しづくしづく）と降り注ぐ。

のか。

史上最悪の、極悪人によるものだつた。

「なーこ?
いるんだろう?」

小鳥大歌

お前……」
憤慨だなんて強い感情を抱けない俺には、続けるべき言葉が、見

二十九

いや……むしろこれは、俺にとって望んだ結果に近いと言えは近い！

だがこの後に及んでも、俺は。

怒りも悲しみも驚きもましてや喜びも、憐憫も焦燥も憤慨も慨嘆

もましてや狂喜も、何一つ浮かんで、こなかつた。

その瞬間 悟った。悟ってしまった。

俺はもう、壊れてしまったモノなのだ、と。

『本当に、そうかな?』

「……え?」

意外と言えば意外、必然と言えば必然に。

俺の思考に異議を申し立てたのは、遠辺翡翠だった。

『ねえ。最近のクーザって、ほんの少しだけど、楽しかつたり悲しかつたりしたこと、あつたよね?』

子供を諭す親のよう、翡翠が優しく語り掛けてくる。

「……ああ

例えば、律先輩を看取るみつきを遠くから眺めていたとき。

例えば、朱野原比奈と話していたとき。

例えば 遠辺翡翠と、話していたとき。

ここ最近は、ほんの少しだけ、人間らしさの欠片に触れる機会があつた。

でもそれは、部屋の隅に落ちていたパズルの一ピースを見つけたようなもので。

とてもじゃないけど、俺の中の人間が完成するには、ほど遠い。そもそも全てのピースを集めたところで、完成した一枚の絵になるかどうかが疑わしい。

『じゃ、逆に考えてみて。普通の人だったら何か感じるだろう場面で、クーザが何も感じなかつたことも、あつたよね?』

「……ああ

例えば、貫いた俺自身。ガラス

例えば、五十瀬正義と神斜大地の決闘。

例えば、雨の帳、捨てられていた猫の末路。

例えば、ついさつき通り過ぎた、五十瀬正義の死体。

何も感じませんでした、の一言で済まされる筈もない出来事で。俺は、何も感じませんでした。

『うん。さて問題。この一種類の結果が起こった状況には、決定的な差があります。それはどこでしょ?』

「状況の差、だって……?」

何を聞かれているのか、よくわからないんだけど。

『じゃあヒント!』

早い気もするけど。

『みつきを先にわたしのところに来させて、クーヤは五十瀬先輩を見てきて。それが 最初で最後の、ヒントだよ』

答え合わせは屋上で。

そう言って、翡翠は通話を絶つた。

「……なんだって?」

「……わたしにも聞こえたよ。くーや、どうする?」

いつになく他人行儀な目で、俺を見据えて、みつきは微笑む。

彼女は、この不可解な提案に対し、完全に選択を俺に任せていた。

「俺は……」

半信半疑ながらも 翡翠の提案に乗らない理由はなかつた。

だつて、駄目で元々なんだから。たとえば翡翠がみつきと二人きりになりたいとか、その程度の意図で俺に嘘をついているとしても、それはそれで興味深いし。

「……いいのか?」

念のため、みつきに尋ねる。

遠辺みつきと遠辺翡翠。

最善と最悪の両端にあって、どこか根底で似通つたもののある双子。

彼女たちの仲は、同属嫌悪以上の計り知れない何かが原因で、あまり芳しくないはずだけど。

「うん。それでくー やが救われるなら

清々しいほどの即断だった。

その笑顔は、一片たりともいつもと不变の、普遍の笑み。

「わかった。それじゃ、行ってくる

だから、安心した俺は、みつきの笑顔を見た、最後の瞬間だった。

それがあるいは、みつきの笑顔を見た、最後の瞬間だった。

そのときの彼女の心情を　俺は、恐らく一生理解できないだろう。

全てが終わった後。他人と他人がわかり合つことなんて不可能で、でもそれ故に　なんて当たり前の事実を嫌つていうほど思い知らされてきた俺は、今更のように心から思つた。

16・遠辺翡翠

時計塔の中腹には不自然な突起があつて、まるで獲物消化中の蛇みたいな趣になつていて、そこがわたしの住処だった。

「ぽこぽこと気泡を建てるチューブの入つた清潔な水槽を泳ぐ、色鮮やかな熱帯魚。画面を一分割できる大型テレビの先に散乱する、大量のゲーム機器。ソフトの種類は、わたしという都合上、大体が音ゲーかRPG。使い込まれた木製のちやぶ台を挟む形で置かれている、二人は寝転べる太さのソファー二つ。

「服、サイズ合うかな……」

嫌な想像をしてまつた。まあそのときはそのとき、唯先輩がアリスを呼び出して、貸してもらおう。聴いている限り、みつきちゃんが後どのくらいで来る設定になつているのかはわからないけど、クーヤが来るのにはまだ時間があるだろうし。

バスタオル一丁のまま、乾きかけの髪をドライヤーで温めつつ、衣裳部屋へ。クーヤのあらゆる希望に応えるために用意した、女の子にはイマイチよくわからない趣味の服のコーナーを通り過ぎ、クーヤと会つ（この）日のために取つておいた、至つて普通の制服に着替える。

これを着るのは何年ぶりだけ。

「えつと、みつきが生まれてからだから……」

大体一年前くらいかな？

ちょっと胸周りがきついのは、嬉しい痛みといつゝ口で。一年の時を経て、腰まで届くくらいに長くなつた髪。それが、わたしがクーヤを待つた時間を表す、目に見える証。

わたしには見えないけど。

制服のポケットから、入れておいた大きなハサミを取り出す。右手で髪を掴んで安定させて、左手でハサミを開く。後ろ手で切る形になるけど、わたしには関係ない。

「さよなら、わたし遠辺翡翠

迷いはなかつた。

バサリ、と重さを感じさせる音を立てて、散乱する髪。

「後で、掃除しなきやね」

全でが終わつた後で。

ともあれ これで準備は整つた。

これまで感じたことない至福の瞬間への期待に、思わず身を震わせる。

「待つてたんだよ……ずっと。クーヤ

透明な殻の向こうから彼の告白を、断腸の思いで断つたその日から、大体一年。

彼とわたしを隔てるものを排除するための舞台はよつやく整つてもうすぐ全では完結する。それが彼にとつていいことなのかどうかは、価値の重さを考えることを捨ててしまつたわたしにはわからないけど。

今迎えにいくよ、クーヤ。

わたしは、ずっと待つてたんだから。
わたしが、わたしに戻る日を。

そういえば、みつめと出会つたのは、今から一度一年前くらいの

ことだけか。

どんな機会があつて知り合つたかは、よく覚えていない。多分、その前から交友があつた翡翠が紹介してくれたとか、そんな理由だつたんだと思う。確かに、俺が初めてみつきと対面したとき、彼女もそこにいた気がするから。

それにしても、今更ながら、ふと思つた。
みつきは、なんでここに送られてきたんだ？

異端者を世界から隔離する、『I』というシステム。

この国を最深部から操作しつつも、決してその正体を悟られるこ
とのない黒幕組織（組織かどうかすら不明なところが、巧妙極まり
ない）。

具体的な選別法はともあれ、俺が今まで『学園』で遭遇した人た
ちは、確かにどこかしら歪んでいた。

みつき以外は。

「訊くわけにもいかないけどさ……」「
興味は尽きないけど、さすがにね……」

「で……五十瀬先輩、か」

五十瀬正義。『普通真人間』。目立つた特徴のない優しい人。

ただ、彼の優しさは、それだけしかないせいでの、突出しすぎてしまつた。人を憎めないくらいに。

恋人を殺した殺戮鬼さえも、本当に、憎めなかつたんだろう。
だから、返り討ちにあつた。

……翡翠が伝えたいことも、その辺りにあるんだろうか。
『答え合わせ』。彼女はそう言つた。

「全く……落ち着かないよな」

自分より自分を詳しい奴がいる、っていうのは。

彼女の答えが、俺の真実とは限らないけど。

俺が今出せる答えよりは、より正答に近いだらう。

神斜大地は、森守深澄は、いつの間にかいなくなつていた。
残された還界或華だったモノの残骸は、ひどく綺麗だつた。

心臓だけを、まるで初めからなかつたように抜き取られていた。惜しむらくは返り血が彼女の顔を穢けがしてしまつていてことだけ、それはこれからいくらでも改善できる失策だろつ。少なくとも、あの殺戮鬼はそう考えているに違ひない。

処女作を作り上げた彼には、最早歯止めなど存在しない。己が欲望のままに狩り尽くし食り尽くし、無人の荒野でその生涯を晒わらい、自らを終えるだろう。僅かばかりの羨望と共に、そう思つた。

そして、屋上と校舎を隔てる鉄扉てつびに寄りかかる五十瀬正義と対面する。

瞬間。

尋常を遙かに超えた既視感に、胃から這い出るものをおさえきれなくなる。

「な　　ハ、グ、エ」

混乱。

意味がわからない。意味に意味を喪失する。

五十瀬正義は　　腕を組み、胡坐をかいて、座り込んでいた。あのとき、律先輩と将棋を指していたときと、全く同じ格好で。深々と突き刺さつたナイフの位置は、いつまでもなく律先輩と同じ腹部。

再現というには　　余りにも同一すぎる模倣。

あたまがおかしくなりそうだ。

だつて、これはあり得ない。存在してはいけない光景だ。

何故なら

「ツは、はあつ、はあつ……ふう……」

ここ最近見た死体の中でも、予想外だつたという点で、一番の衝撃だつた。体の中身が空っぽになるくらい汚物を廊下に撒き散らし、腐臭と死臭が交じり合つて更なる吐き気を催してくれる。白熱した思考は思つようにも凍ららず、納得のいく回答を求めて勝手に虚数域の海で試算を始める。

だけど　　そんなことをするまでもなく。

俺は、全てを理解していた。否。理解させられていた。

考えるまでもなく、世界最悪のお人好し（スケーパゴート）に。

この殺人に、計算はなく。

ソレ 為なのだ、
と

感情は、人間の中でも最も尊ぶべき普遍で。

卷之三

頭を強く噛み、意識を掌

俺といふカタチの欠陥。それを理に

時間軸を一年前へ。全ての始まりと俺の終わり、その先端を回顧する。

俺の欠落とみつきという平満。遠辺みつきと遠辺翡翠、二人にして一人の点対称。殺された一人の恋人と、満たされた一人の恋人と、殺されるべき一人の恋人。無感動と有感動の境界線を分かつ引き金の解。

……わかつたよ。
全部、わかつた

あるいは、今までの俺の停滞は、この答えを導き出したくなかつたが故の凍結だったのかもしれない。

それでも。

気づいてしまったからには
決着は、つけなければならぬ。

他ならぬ彼女が、それを望んだからには。

俺が、人間になるために、最後の殺人を、始めよう。

第七章 もふたりでひとり、ふたりはひとり

第七章 もふたりでひとり、ふたりはひとり
(Is she here?)

18・遠辺みつき

「大好き」

『大嫌い』

わたしたちの会話は、一年前と同じように始まった。
それも当たり前。だってわたしたちには、元々これしかないから。
場所は、屋上にある尖塔型の時計塔、さらにその尖端。前日の雨
でまだ濡れているそこにわたしたちは隣り合って座つて、沈み行く
夕焼けを眺めている。

「……久しぶりだね、お姉ちゃん。元気だった?」

『うん。みつきは……聞くまでもないよね』

顔を向けずに、わたしたちは話す。

「あ、何それ、どういう意味?」

『どうつて、そのままの意味だよ?』

「むー。お姉ちゃんのいじわる」

そんな当然のこと、言わなくたつていいのに。

「でも、いいの?」このままだと同じじゃないの?」

一年前と。とわたしは聞く。

『違うよ。今のクーヤは、ちゃんと罪を持つてる(人間してる)も
ん』

ずっと逃げてばかりのあの頃と違つてね、とお姉ちゃんは答える。

「お姉ちゃんのお陰でね」『わたしのせいでね』

わたしは微笑んで、お姉ちゃんは微笑んだ。

同じ行動をとったわたしたちは、でも決して重なり合えない一人。じんなに近くにいるのに、わたしたちはとっても遠かつた。

『……ごめんね』

お姉ちゃんが、不意に謝った。

どんなときになつても、どんなことが起きてても、必ず悪とされる方に身を置くために生きているお姉ちゃんが。そうすることでしか、善いものがそこにあることを感じられないお姉ちゃんが。

「いいよ」

わたしは首を振つて、体重をお姉ちゃんに傾ける。わたしの身体が少しづつ少しづつ、お姉ちゃんの身体に沈み込んでいく感覚。

それは、役目を終えた太陽が地平線に没するイメージに似ていて。わたしが後に遺すのは、残照のように贈り手のいなアンゼ贊美歌。

『……わたしはみつきちゃんを利用したよ。みつきちゃんが生まれたのもみつきちゃんが死ぬのも、全部わたしの身勝手のせい。それを見つきちゃんは 許してくれるの？』

縋るよつてお姉ちゃんは尋ねる。だつてこれは、お姉ちゃんにとって初めての、悪も善もない、自分の意思だけを物差しにしてとつた行動だから。迷つちやつのも、仕方ない。

「うん。だつてわたしは、遠辺みつきだから。わたしは、わたしを許すよ」

くーやは、お姉ちゃんのことを、他人をまるで自分自身のように捉えることで、対象者の全てを共感する、と言つてたけど。それは裏を返せば、お姉ちゃん自身も、常に自問自答を繰り返したつてことでもあつて。

その深い苦しみからお姉ちゃんを解き放てるのは、お姉ちゃんの他人ではない、わたししかいなかつた。

『……ごめんね。ありがとう。みつきちゃん』

「みつき。ありがとう。お姉ちゃん」

そこで、わたしたちを溶かし合つ作業は終わつて。

わたしたちは、ずっとずっと昔のわたしたちとして、一つになつ

た。

19・孔谷透

神斜は苦労して螺旋階段を上るつとじていたみたいだつたけど
買出しの度に下界に下りてくる翡翠が、いちいちそんな面倒なも
のを使うはずがない、といつところには頭が回らなかつたらしい。

「確かこの辺に……お、あつたあつた」

赤いボタンをポチッと押すと、巧妙に壁に偽装されたエレベーターが開く。乗り込む。目的地は一つしかないから、回数表示はもちろんない。

数十秒の軽い浮遊感の後、ドアが再び開く。そこは、翡翠の家のリビングだつた。

「ここに来るの、久しぶりだな……」

何度かきたことはあるんだけど、何故かすれ違いになつてしまつて、会つことができなかつた。前に会つたのはそつ、一年前の

「……あれ以来か。はあ……」

気が重い。

いや、気分は軽くなつたんだけど。

さつきから、徐々にだけど、俺に感情らしきものが戻りつつあるのを感じてゐる。人間気の持ちようで世界はいくらでも輝いて見える、とは誰の言葉だつたか。世界が実際はどんなに醜くて見るに耐えないものだとしても

「関係ないね。そんなこと」

伊賀奇先輩の言を拝借してみる。

実際など不要。真実など不要。

ただそこに、俺たちの世界があればいい。

思考が逸れた。やはり、俺の無意識はとことこの件について考
えたくないらしい。

「さあ 現実に決着を付けにいこうか」
屋根裏から、この世界の天辺へと上る。
進入を拒むような突風。構わずその場所へ辿り着く。
そこには。

「ここにちは。久しぶりだね、くーや。」

一人の少女が、待っていた。

第七章+ふたりでひとつ、ふたりはひとつ+（後書き）

ふゆき は こんらん している！

……なんだか話が消えたり消えたりしてるなあ、と思つた方。全て
機械音痴の作者のせいです。申し訳ありません……。o_rz

最終章 + 終わり始まる物語 +

(I do not like you . But , I love you .)

20 . 孔谷透

少女は、あの日のように半没の夕陽を背景に、不安定な足場の上に臆することなく佇んでいる。

その表情は穏やかで、一度と光を映すことのない瞳は、真っ直ぐこちらを見据えている。

俺が世界で一番好きだった眼光は、すっかり失われていた。それは一年前、彼女が俺を拒絶した確かな証だつた。

「……待たせたね。随分と」

うん。ホント、待ちくたびれたよ。

少女は、他に形容するあらゆる言葉もなく、微笑んだ。この場所こそが俺の原点。彼女こそが俺の始点。

「なあ……」

ちょっと待つて。せつかくだから、初めからにしようよ。

俺の言葉の先を感じ取ったのか、少女は僅かに慌てたように俺を制した。

「初めから……つていうと?」

辻富律から始まつて、わたしで終わるまでの道のりだよ。

少女は、物語を読むように答えた。なら、そうしようか。

律先輩には、色々迷惑を掛けたしな。

辻富律。

「と言つても……別に、不思議がるほどの事件でもないだろ？」

一番自然な解釈が、単純に正解なんだから。

本当に簡単な話だ。現場は密室で、二つある鍵の一つは殺された律先輩が持つていて、もう一つは俺が持つていた。それだけで、説明は充分だ。

「そうだな……強いていえば、律先輩は本物だつたよ。それは感動した」

優先順位を違えないという辻富律は。

一局の将棋に賭けられた五十瀬正義の命を、迷うことなく自らの命より上位に置いた。

タイムリミットまでに、伊賀奇先輩のように逆転の手を思いつくことはできなかつたけど。刻々と抜け落ちていく血を完膚なきまでに思考から排除したあの潔さは、彼女にしか出せない神域だつた。それで、何か感じるものはあつた？　と少女が問う。

「ああ。危うく惚れそつた」

それは危ないね、と少女は笑つた。

そして二つ目。

五十瀬正義。

「しかし、五十瀬先輩は……なんていうか、不憫だよな。結局最後まで、個人として見てもらえなかつたなんて」

誰でもよかつたわけじゃないよ、と少女は言つた。

ある程度俺に近い人である必要があつたのだ、と。

「範囲で指定してるとこでもうな……」

俺に、最後の発見をさせるためのお膳立て。

蛇足として、犯行手口を同一にすることにより、犯人が単独犯と思わせるための殺人。

「伊賀奇先輩辺りなら一発で氣づくと思うけど」

大丈夫だよ。あの人は理解しても解決しないから、と少女は微笑

む。

その通りだ、と思った。

そして最後。

俺自身。

難問といえば これが一番の難問にして最大の鬼門だった。
そもそもの大前提。俺が『エ』に選定された理由は、決して心が
欠落しているからではなく。

わたしがくーやを拒絶したあの日から、くーやはくーやを拒
絶したんだよね。

遠い昔を懐かしむよつこ、少女は言った。

その通りだつた。

目の前の少女に、俺が想い焦がれた彼女に否定された俺は。
俺にとって理想の偶像を、この孔谷透の中に作り上げた。
だから 俺がみつきと行動しているときに感じた俺の感情は、
みつきのものとして処理された。

喜びも怒りも哀しみも楽しみも。

その奇異にして異端な逃避法こそが、俺が持つ最大の歪み。
故に、その識別称号を『透明な殻を嘆く離』。

この世に生を受けてなお、一度たりとも世界と交わることのなか
つた遠い遠い領域外。

そんなことをしても、俺がここにいるという事実は、ちつとも変
わらなかつたつていうのに。

“ 『 月まで行けば、君の身の丈は変わるのかい？』

今更のように、神託めいた伊賀奇先輩の先見の言を思い出す。
一体あの人は、あの時点でどこまで知っていたのか。どこまで理

解していたのか。

「なんにせよ やはり、できることなら近づきたくない、怪物じみた人だった。

「今ならわかるよ。あれだけ俺を好きだった遠辺が、あれだけ遠辺を好きだった俺を断つた理由が」

それは、俺から逃げ場を奪うため。

人間として 終わりを始まらせるための、一番最初の作業。遠辺みつきを幻想した俺は、それ以降の人生を、自らの手で自らの足で自らの意思で、費やしてかなければいかなくなつた。

突然大海に放り出された蛙のように面食らつた俺の心は、感情を欠落させることで防御策としたけど、そんな歪みが長く続くわけもなく。みつきがいなければ、俺は一ヶ月と持たず壊れてしまつていただろう。

「だから、みつきには感謝してる。……たとえ原因が、ある意味で彼女にあつたとしても」

翡翠に鍵として利用され、俺に盾として使用され、それでも彼女は笑顔だった。

ずっととずっと、俺にとつての理想であり続けてくれた、最後の俺自身。

本当に感謝しています。

だから、もう。

あなたを苦しめるることを、止めようと思つます。

「……もういいだろ？ 始めよう

最後に、お願いしてもいいかな？

ぐるりと背を向けて、初めて俺から視線を外した少女は言った。頷くことで答えた。見えなくとも、彼女には関係ない。

ややあって、少女は紡いだ。

遠辺みつきを、嫌いにならないで。と。

遠辺みつきを、嫌いにならないで。

ひどく人工的な括られた世界を眼下に、わたしは言った。
それは、とても身勝手な懇願で。卑怯で愚かな女なわたしらしい、
子供みじたものだった。

純粹潔白な《彼》を陥れ、わたしたちと同じ位置まで引き摺り下
ろしし、あまつさえその手を真紅で穢した。

渴望していた《彼》の告白を躊躇なく断り、《彼》の求めるもの
をこの手で永遠に葬つた。

傷つくると簡単に壊れてしまうから何重にも張り巡らせられた防護
壁の中にいた《彼》を誘い出し、殻を剥ぎ取つた。

罪深さで言えば、わたしほど罪深い人間はきっと他にいないだろ
う。

だから、わたしは

「大丈夫だよ。それだけは、絶対にない」

返答は力強く。

《彼》は、決してわたしたちを否定しないと、断言した。

それは、殻の内にいることから来る自信とは違つて、剥き出しの
彼自身の言葉だった。

本当に？ わたしは、声の震えを抑え切れずに、最後の糸に繋る
罪人のように哀れみを誘うだろう表情で聞く。

「ああ」

《彼》は一寸言葉を切り、世界をぐるりと一望した。その瞳に相
変わらず強い光はないけれど。全てを包み込むような優しさが、心
臓の鼓動を示すように灯つっていた。そう、感じ取れた。

「……たくさんの人たちを見てきた。たくさんの意思と希望があつ
て、その全てが報われたわけじゃなかつたけど。その全てが美しか
つたわけじゃなかつたけど」

他人を求めるその心に。嘘なんて一つもなかつたよ。

俺がそうであるよ。」

それが、この一年、世界を生身で感じて得たたつた一つの答えだ、つて。

それだけは確かめた。それだけで充分だ、つて。

『彼』は、爽やかな笑顔で、わたしの不安を吹き飛ばした。

「だから。……人間にすらなつてなかつた俺は、ここから人間を始めようと思う。この世界で一番、人間らしい行動から」

『彼』が地面と水平に伸ばした左腕の先には、明確な決意を秘めた漆黒の拳銃。標準はわたしの心臓。

わたしはゆつくり目を閉じて、その瞬間を待ちわびる。

「……ありがとな。一年間、待つてくれて」

ううん。そつちこそ、ありがとね。

一年間、わたしを想い続けてくれて。

『彼』が苦笑する声が、最後に聞こえて。

わたしは、これ以上ない安堵に笑顔になる。

それは、世界で一番醜く儚い物語の終幕に安堵して、笑顔になる。それは終わりから始まり、始まりに終わる物語。全てがそうであるように、始まり、そしていつか終わる刹那より短い素敵な夢。

だけど、きっと大丈夫。どんなときだって、物語の価値は、長さなんかじゃなく、一瞬の輝きで決まるものだから。一度と別たれることのないわたしたちの物語は、他のどんなものよりも

「おやすみ。みつき」

一瞬、間があつて。

始まりと終わりを告げる空砲が、ハッキリと世界を壊した。

最終章+終わり始まる物語+（後書き）

“じこから話せばいいものか……。

えっと、結論から言つて、全ての混乱の始まりはこの章の前にHP
ローグを投稿してしまつという空前絶後のミスから発生しました。
あれ、なんか急な展開だなあと思つた方、本当に申し訳ありません
……。zn 今は直しましたので、ご安心をば。

あ、という訳でもう一話あります。今度はソロローグに続きます。

0

孤独と書いてヒトと読み、
一人と書いてゼロと読む。

これは、俺がヒトになるまでの最初の一歩。
これが、俺がヒトになるまでの最初の一歩。

生まれたときから一人だった俺は、きっと人間以前のモノでしか
なくて。

傷つけられることだけを恐れていた俺は、たくさんのモノを切り
捨てて、ようやく人並みのヒトになつた。

その代償として、たくさんのものを犠牲にした。友人とか年月と
か、ひとりの少女の、あらゆる全て。もう謝ることの出来ない
場所へ行つてしまつた人もいるけれど、恐らく現時点ではまだ、謝
罪をしてはいけないんだと思う。俺がこの世界で、どうにかこうに
か生きている内は。……それでもいつか、頭を下げに行こう。全て
が終わり、でもどこかでは何かが始まつていて、そのときに。

だから、今はただ、傍にいる彼女だけを精一杯想おう。

本当に、彼女には、あるいは彼女たちには、感謝を尽くしても
尽くし切れない。人間以前だった俺に、一体何を感じたのか。何故
遙か高いところから、その手を伸ばしてくれたのか。その問い合わせに彼
女は、ただいつものように笑つて、答えてくれなかつた。……それ
でも、伝わるものはあつた、気がする。今の俺には、少しだけ理解

出来た。

かくして、この物語は幕を閉じる。

けれどもちろん俺の汚濁と血の匂いに塗れた旅路は続く。

この壊れかけた世界で。みんなを救ってくれるとは限らない、冷たくもどこか優しい、淡雪のような優さを持ったこの世界で。

確かに足場などない。日常は常に不安定で、ふとした拍子にぐるりと反転し、喉元に刃を突き付けてくる。

それでも。

殻を振り払った俺は、まだ未熟者だけ。

彼女が隣にいる間だけは、どうにかこうにかやつて行ける。そう、確信していた。

一度名前を捨ててまで、ずっと隣で俺を想い続けてくれたその強さは、痛みを感じるほどに胸に刻み込まれているんだから。

最初の一歩目は、^{とおのくみつけ}愛する彼女と共に。いつか、死が一人を別つその日まで。

さあ、人間を始めよ。

……い、今度はちゃんとHペローグです、完結ですよー。うん。
その筈です。ようやく終わりました。

無駄な所で右往左往あつましたが、とにかくに元へ、ここまでのお金
付き合いありがとうございました。余計なことは語らはずこ、静かに
幕を閉じたいと思います。では、また機会があれば、そのときこ。

……もつかい見直してこようっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3221c/>

終わり始まる物語

2010年10月8日15時03分発行